サハラ大沙漠

長田秋濤譯

路一轉佛領アルジェリヤを經て大アトラ南方山麓より始まり大沙漠の門口に到る、烈々火の如き天日の下廻望一物の影を見ざる熱沙の上を、駱駝背上萬里の行を成す、彼の名だたる三角塔や、スフィンクスや、見るものざし新ならざる無く、或は一陣の狂風沙を卷いて怒濤の如く寄するに驚くあり、或は渴泉に苦む事幾日にして偶一前途島の如き綠土を認めたるの喜ありて、讀者一度卷を繙けば思はず快哉を叫ぶに至らんや必せり。

長田秋濤譯

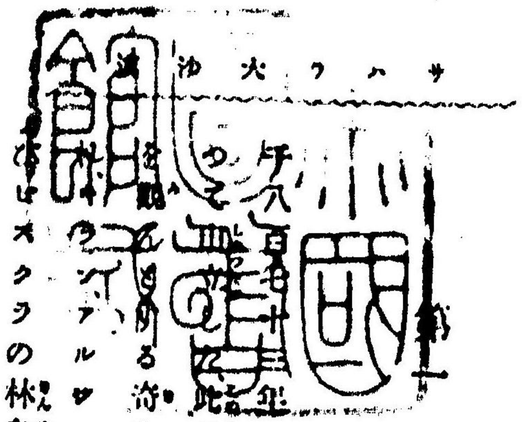
サハラ大沙漠

春陽堂版

サハラ大沙漠

長田秋濤譯述

從コンスタンチーヌ(アルジエリヤ)至沙漠の都府



第一

千八百七十三年二月十一日予はコンスタンチーヌよりビスクラに向かつて此目的は大アトラの南方山麓より始まる大沙漠の門口なる清なる目的であつた、今は此險嶺に三條の道路が開鑿さ

サハラ　大沙漠

れ、ビスクラ、コンスタンチーヌよりサエリヤル、エルアグア及びオクラの林泉地に通ずるものである、大アトラ山は河岸を平行線に添はず寧ろ東北より西南の方に傾いてある爲に、此ビスクラはアルジエリヤの最東部に位し、先づサハラの大沙漠の林泉地中には最も近

い所で、ヴェリツル、ホルアグァに往くには、大約一週間を要する、併しビスクラはコンスタンチーメより二十六時間を以て達することが出來る、此ビスクラは林泉地中最も有名なるものであつて、歐羅巴人の入口の多きは此地を以て隨一としてある、加之此處に導く道路は、ゾーレー山を超ゆる爲めに風景は先づアルヴェリヤ全州の美を見ざるものと云ふて宜しい、又一般の旅客は此ビスクラを通つて初めて其全沙漠の如何及林泉地の如何を知ることが出來るのである、

コンスタンチメーよりバトナまでは郵夜蹄合馬車が往復して居る、此邊は旅行中見るに足らざる所である、リコンメルの谷を越えて、道路は小アトラス及び大アトラスの兩山間に横はる所の大荒地を通過して居る、予が此邊を十分に觀察した所に據れば、此邊は則ち不規則なる低地でゆつて、餘り高からざる波濤狀を爲せる低き山々の間に散布して居る村などは稀にして荊棘は僅に諸處に散布せる岩石を蔽ふのである、

馬及びニュミーガルクーヤ時代の古跡は到る處の諸處に殘つて居つて、アルヴェリヤに於ける近世の殖民に對し、一方には勇氣を鼓し、又一方には落膽せしむるやうな有樣を最する、時々馬車の窓などに面を出して、車外の有樣を眺むると、幾町となく續ける洋燈の光りは、何となく物凄き思ひを起さしめる、

是等は則ち亞剌比亞人がコンスタンチーメに向つて荷物を運搬するのである、恰も無數の生蟲が宇宙の間を暗夜に蠢じて徘徊する如き有樣に見える、予は此暗憺たる荒原中に於て是等の行商に遭遇したる、怪奇に殆ど驚を發からしめた、彼の中ゆる駱駝の形容の奇なる、實に映畫巴文明の眉の前に斯の如き一種異樣なる東洋の風俗を觀察して其照應の妙なるには啞然として驚歎するのみであつた、予が馬車の伴侶なる一人は、此有樣を見て土民の農作者、或は工業者として、遂に驚くべき白相人種の競爭者となるべしと云ふことに就て頻に慨嘆して居つた、實

に彼等土民は僅かの給料で生活することが出來、小さな草廬の中に臥し、或は妻子をして勞役に就かしめ自らも亦鋤鍬を執つて田地を耕作し、收穫すればアルの市場に產物を賣却し、縱令利益は少くとも、平然として燦爛たる星の下に寢ね、路傍の清水に嗽ぎ、宇宙の間一の樂とする事はない、然るに之に反して、小作人は其住居及び運搬費等に費用を要するのみならず、歌羅巴人より種々なる物品を購なふ費用の高き、殆ど自搗に堪え難き程であつて、從つて其地面の幅員の擴がるに從ひ、其納める稅を增し、殆ど四法以上を要するに至るとのことである、

夜の明方にバトナの城壁の下に到着した、此地は海面を拔く千米突の所であつて、一方にはサーレーの第一の城砦に臨み、一方にはヴェベルシュッメの着陸たる山巔を帶び、此地は最も汚穢なる、最も眞黑なる町である、此處は軍隊の所在地で、總督を除けて、宿營會は將校の移られたるのみにして、此軍隊駐在の場内には珈琲店も有り又數多の雜貨商

の如きもあるのみならず、一個の寺院も作られ、土民の住居は此城壁以外に作られてある、而して其地を名けて黑人村と呼び僅かに草廬が形くられて居るのである、

エリセの官吏は予にバトナの軍隊の長なる將軍がリッフェー公に懇篤なる紹介狀を與へられた、然るに不幸にして予が此地に着いた時分には、將軍は遠征隊を組んで、サハラの中央なるツーグールに出發の後であつた、予は氏の不在を聞いて非常に落膽した、予は此人の力を借りてビスクラの近邊を十分に見物するの便を得やうとした譯である、

予は暫らく熟考したる後何か他に見物する處もあらうと非常に考へたところ、ウェドリールの林泉中に於て、沙漠中なるウァットスーフの奇なる境を見物しやうと云ふ念を企てた、然るに此バトナの直則北距國の局長なるウァーコー大尉はツーグルーへ電信を送つて其れた而してガリッフェー將軍の紹介狀を送ると同時に、予が此遠征軍に加は

りたいと云ふ事を以てして與れた。サハラに於ける陸軍軍隊的運送の好其なるが爲に、五六日中にはビスクラの遊觀を得る事の望みがあつた。併しバトナよりビスクラに往く馬車の發着は最も不規則である。尖故に予はランベースの古跡又はサヤベルシェラタ山の柏樹の森などを觀覽して、バトナの淋しき町に僅に二日間を日長く暮した。

遂に十五日の朝四時、沙漠一通ずる所の馬車に乘つた。道路は谿谷の間に造られてある、寧ろ谿谷の間と云ふよりもサヤベルテーレーの山腹にある大きな町であつて、旅客は此處か谿谷であると云ふ事を知らずして過ぎるのみならず、是がサハラと内地との分劃線であるなどゝ云ふ事に氣が著かないで通る。併し次第に南方に來るに從つて山の性質が變つて來る。小石の多き小流はサハンの平原に向つて非常なる勢ひを以て流れつゝ、ウエッドベダラの邊を瀕觀して居る、波狀的にして且つ低き荊棘の繁茂して荒原たる如き林叢の所を過ぎると、忽ち岩石多

き壯大なる眞の沙漠中に出る。此處を通りつゝ遙かに見ゆる山は則ちテーレーの山嶺であつて、其三角形狀の頂きには積雪皚々として、此熱林地に於ても猶ほ寒き感を起さしめる。

此邊にも尙ほ種々なる古代の殘跡かある。併しながら此殘跡は決して古代文明の潮流が此地に流れ込んで、それが遂に此土中に埋もれたと云ふ價値あるものでない。是等は人をして悚然たらしめる、即ち近世の內亂の時に於て鐵と人とを以て血を流さしめたる痕跡である。行く〳〵驛者は指して、此土地の掠奪火災殺戮等の狀況を詳細に說明した。即ち或村に於ては一夜の中に九十二人の小作人が、老若男女の別なく盜られたとか、又は行商定泊處、吾々が今馬を駐めたる所の家に於ては、農夫が其妻と共に此處に逃げて來て居つた所が、二十人の亞剌比亞人が襲ふて來て搶戰し所であるとか、又此處はシャッサンの耕作地であつて、此處に住するシャッサンは有名なる獅子獵者であるとか、彼か町に住

きし留守中に、亞剌比亞人かゝ其家に侵入して、若き小兒を殺したのみならず、其妻を拐して仕舞つた、シヤッサンは家に歸つて此不幸なる事を聞き、遂に病死して仕舞つたとか、斯の如き談話をして、其土地の有樣を既明して與れた、

然るにウエッドベダクの谿谷は、始の中はなか〳〵大きく、且つ不規則なものであつたが、段々進むに從つて狹くなつて、殆と吾々は鳥籠に這入るやうな心持になつて仕舞つた、其間に流れる谿流は、石に激して其勢ひ凄じく、遂にエルガンダの入口まで進んだ、則ち此處は沙漠の入口フームエッザハラと名けたる所で、此地に至るまで何となく天は霞を帶び、空氣の流動は激しい、今迄ッーレーの雪を拂つて來る所の風は涼しくあつたけれども、此處に至つて溫き風が面を拂ふやうになつた、而して吾々の眼を遮ぎる所の霞が霧れたならば、蒼々とした空は眼前に現はれるであらう、太陽の光は次第に威を逞ふして、沙漠第一の溫度

氣を吾々の身體に返つて來るやうな心持がした、吾々は此入口に架けられたる羅馬の遺物たる古き橋を渡つた、此邊に在る所の古き石像などは、旅客をして其壯麗なる淡に思はず歎聲を發せしむる位である、即ち此處はアルッエリヤの最北部の林泉地なるエルガンダと唱へる所であつた

今此處に遠慮なく言へば、予が林泉地と云ふものに就ての考は、豫想して居たものと全然反對であつた、予が曾て書物上に讀み、人の話に聞いた事と丸で其の趣きを異にして居る、予は林泉地と云ふと、庭の如きものあるし、また森の如きものもあると云ふ考を持て居つた、豈圖らんや、林泉地と云ふても凄然たるものであつて、僅かに棕櫚の樹が溝處に散在してある位のもので、沙漠を照す太陽は、金鈸も嫌けむ如き動ひである、諸方を眺むれば、青き物は眼に入らず、又陰などを得る所は更に無い、只赤味を帶びたる岩などがあつて趣味などは毫も無い、

此エルガンダーの婦人は容貌の美なる者が多い、中々其名を知られて居るが、吾々は途中に於て水を汲みに往く二三の婦人に遭遇した、コーランに祀戒してある所の婦人の有様などゝは違つて、此處の婦人は顔に布を蔽はず、頭に帽子を被らず、路處を逍遙する、中で最も若いのは隨分美であつた、又其歩行の容子などは彼等の軀幹の立派なる事を表明して居る、頭髪は黑くしてしとやかに梳づられ、眼光は爛々として、如何にも一種の凄味を帶びて居る、

エルガンダーを出立すると、道路に小石が多く、豐饒を以て有名なるルーダイヤに近づくまでは殆ど間斷なくある併なからエルルーダイヤも近年の内亂の爲に、非常に荒蕪に屬して仕舞つた、エルガンダーの川を渡つて最後の山を超えると、此處に初めて沙漠か現はれる、即ち此山の頂きをメファ嶺と呼ばれて居るが、千八百四十四年佛蘭西の軍隊が初めて此頂きへ來て、海が見えたり、海が見えたり、と叫けんだと云ふことであるが、實に此處に來て見ると、彼が斯の如く考へたのも無理はない、殊に夕陽が沈んだる所の有様と云ふものは、殆ど太洋と沙漠と遠はないやうに見える、眼界の濶きる所一木一草の眼に入るなく、諸處の林泉地のある所は島の如く見えて居る、此黒色は太洋を望むよりも、何となく耳目をして、人間の感情に於て一種天地無窮の情を起さしめる、一物の雷鳴だになく其鎮靜なることに於ては驚くの外はない、是より一時間ばかり經つてビスクラの城壁を越える、此處は軍隊の駐在所もあるし、又耶蘇教徒もある、此町に這入る處には多少の綠樹が繁つて居て耕作なども多少はして居るやうに見受けられた、洋燈は市街に輝いて居つて、電信柱なども、文明が此地まで進んで居ると云ふことを表して居る、亞弗利加の商業者も居れば、歐羅巴の商業者も居る、二三の珈琲店を始として、佛蘭西カフルなども立つて居る、又土民が踊りつゝ打つ所の大鼓の音が耳をうてば、また彼方よりは嘲哢たるピヤノの調が風に

送られて來る聖弗利加駐在の軍隊の長は嚴然たる服を着て居るのもあり又中には木綿の輕裝に身体を包まれて茫然として歩行する亞剌比亞人なども見受られる、

マーアールとビスクラは昔々歐羅巴人の住つて居る所では先づ最極點と計つても宜い、マーアールは寒暑の別がない位であるけれども、ビスクラに來ると十一月より翌年の四月までは非常な暑でありて日中は攝氏四十度位に昇る夜間は三十度より三十五度位になる、斯なると殆と避くるに道なく、眠になども就けぬ位である、加之ず彼のシミン風が吹いて來たならば、死亡者の數は驚くべき程增加する、尖故に歐羅巴人などは寧ろ此地よりもサハラの內部に往けば多少は涼しさも增すだらうと云ふ考を起す人も取受けられる、マーアールの方は斯の如く寒暑の別はないけれども、始終平均して居るから大に堪え易いのである、

井泉

海胆

ビスクラはラバンの一首府であつてツーレー山の山麓に位して居る、此中には七個の村がある、是等の村は總て此山から湧き出る所の豪流に於て灌漑されてある吾々は此處に着いた翌日ビスクラの近邊の一の泉に往つたが、其名はアイン、エッシッシと唱へて硫黄質を帶びたる温泉であるそれを湯桶に通して來て、歐羅巴人をして入浴せしむるやうになつて居る、其殘りは自然に流れて往つて土民等の、最下級の者等の使ふ湯となる、殊に此湯に浴する者はビスクラのナイツトと稱する村である予が此地を過ぎた時分此湯桶の傍に裸体なる婦人を十二人ばかり見た予は甞て日本と云ふ國の婦人等も、一向風國に構はずして裏などは白昼軒の下にて湯に浴すると云ふことを聞いたが、即ち此邊の婦人も其習慣を持つて居ると見える、ビスクラには是等の婦人が非常に多い、さうして此婦人等は珈琲店などへ遊入こむで、或は太鼓の音に連れて踊つたりなどする、行狀は非常に悪くあるけれども、一たび其

人を持つた以上は行ひも正しくなる、此婦人等の容貌は到底エルガンダの婦人と較べものにならない

予は其翌日第二日目をレーヂーツクバの林泉地を過ぎて、アルサエリヤの最も古き回々教の寺院を觀る心算であつた、然るにアインエンシッシより歸つて來ると、予は此地の軍隊の長より召喚された夫れは予の書簡に對して遠征軍の總督はウアッドスーフに從軍するの許可を與へたのみならずして、ガリッエー將軍は予を總督の陣中に優遇せんと云ふ事であつた、幸ひにして此地の軍隊長クルーセー大尉の盡力に依て、予は翌日ビスクラを出立してツー、グールに往くことになつた、

第二　ウエッドスーフ、リールの横斷

予が旅行談をなすに先つて、旅行前如何にサハラに對する政略のあつたかと云ふ事を玆に簡短に記述する必要があると考へる

千八百七十一年の春の事であつたが、ロククーク等は内亂を起さんとする相圖をアルで宣告した、其事を起さんとする地には軍隊なども駐劄せられずして、アルヂェリヤに屬せるサハラの部分であつて、此處等に住つて居る住民等は非常な勞役に堪へて、日夜心身を拋つて働いて居るのである、住民等は充分に佛國の主權が此地にあると云ふ事を認めない位であつたが、彼等の態度を以て見ると、多少は佛國の恩澤に浴すると云ふ考はあつたやうに見える、

此騷動の起るに先つて亞剌比亞王國の命令と云ふものは認められず到る處拒絶せられて、今日は行商隊がアルの入口に於て掠奪に遇ふたと云ふ慘憺たる新聞が人心を動搖させるのみであつた、之と同時に此種族の競爭者なるものも王國を携へて身を起し、翻然身を干戈の間に投ずると云ふ考を起した、而して佛國政府の命令の下に服從することに就ては隨分議論が起つて、人心は非常に動搖し、殆ど之を沈靜する策を知らぬ位である、西南の方に於てはウラッドレザーレシェークに抵抗せる種族は、我が住へる所の地を引き拂つて彼等が元住ひたる地に引退き、而して當時の詐騙者と呼ばれたシーチュシヤを骨さんと暴民の助けを借つてウアルクラーを奪つた、此報を聞いてウアルクラー、ヴェッドリール、ウラッドスーフ州を佛國の名譽を以て監督せるアリーベーは直ちにツルークールの駐在所を引拂つてアバンに遁走して了つた、後には僅に此護衛兵なる騎兵の小數と土民の射擊兵の數十人とが殘されて居るのみである

今前に掲げた所の州は即ちアルヂェリヤに屬せるサハラの一部分である、此事あつて後數日、五月十五日に暴民は此町へ侵入して來たが、又向ふものゝない爲に直ちに諸所に侵入した、駐在兵は戰ふ力もなくしてカスバに遁れやうと企てた、然るに城外には敵兵多くして是等の者は總て一人も殘ず事なく殺戮されて了つたのである、此時より暴民は

ウェッドリールを獨占し佛蘭西人はビスクラの城外に閉鎖され十數里の間は此暴民等の暴力を逞ふするのを眺めて居るのみである

斯くの如くして北邊は過き去つた冬の近づくと共にサハラの遠征隊は組織せられてチルの邊は全く平穩に歸し、アトクサンの南方は白山に佛國が其主權を恐にすることが出來るやうになつた

其軍隊は組織せられてエルアクアー及シェリヴァルより交戰してラッドシヂーシエー沙漠及同盟者を擊ち第三軍隊はクロアー將軍の指揮の下にカビーリーよりサハラに進みてミクラニューの殘徒を討伐した、此時に當つてジーアカラは我が補兵と伴ふてウェッドリールに往き一發の砲聲も發せずツルークールを取返した、クロアー將軍は十二月の初めに至つて此地に引返して而してウァルクローの林泉地に進んだ、此遠征隊に屬する兵數凡そ五千、一月一日を以て進軍を初めた叛徒は益々遁げ込んで身を隱す事に最も用心深くあつたが、其土

民兵は規則正しき騎兵隊に支へられつゝ逃るを追ふて叛徒等を討伐した、軍隊の半はウァルクロー城中に陣を張つて殘つて居つた此遠隊は勢ひ狙獵であつて其叛徒の大半も殺されたと云ふ評判も立つた

然るに後で聞けば是は虛報であつて叛徒の長は安全に南方トリポリなるラダメー市に到着したと云ふ事であつた、茲に於て遠擊隊はツークールへ戻つて來た而して二月十八日を以て新にウェッドリールを攻擊する爲め行軍することになつた、

予がビスクラを出立した時は、此軍隊等が此地を出立する晩であつたのである、此處に着いて見ると最早一兵卒も居らないことが分つた故に一日も早くウェッドリールの首府へ到着したいと云ふ念慮が燃ゆる、が如く起つて極く簡單なる旅裝をした、予と共に行を同じうするものは土民の暴徒を守るが爲め二人の騎兵及食料品を乘せたる一頭の驢馬のみであつた

ビスクラよりツークールに到る距離は五十二リューで此間には八九の兵站部が置かれてある、斯くの如く距離も少なき爲め四日又は五日を以て終る事が出來る、加之此旅行に就ての利益と云ふものは到る處井泉がある事である、先づ第一ボルゴと稱して行商隊の休憩する場所がある、其地は平素住民もなくしてモルクンの小沙漠中に起られて居るものである、我々はモルクンの沙漠を越えるに二日を費した此原野は波動をなし、昔はサハラ海の北端を常に襲ふた所の暴風の爲にアトラーの曠原より持ち來れる細石又は砂利などに掩はれて居る植物の如きも矮小にして見る影もないが決して皆無とは云へない、ダマクン、アルテミシヤー、ユダイカ、アトリプレックス、ハリムスの類は諸々の小さい丘の上に繁茂して濃き眼色の地と深緑色の空との間に點綴して居る、併ながら其全形を評すれば殆ど見るべきものはないと云ふて宜い位である、我々は後ろを回顧してオーレー山を眺めつゝ缺別の涙

を洩したが、天に聳ゆる大山は是より先き我々の經過しなければならぬ所の幽邃たる沙漠の凄き光景を想ひ起さしめ、覺へず悚然として快を湧した

我々は二日目にクーダアットエルドールに到着したが、此處よりはサハラ海に於ける最も著しき高嶺を望むことが出來たが我々は一の高き懸崖の上に居るのである、我々が足下には平原が横はつて恰も汐が引いて其砂を現はして居る如く見える、唯だ岸を拍つ奔濤の聲もなく、珠を飛ばす銀浪の美もない併し目を屬すれば際涯限なく、凄然たる風光は肩に粟を生ずる如き感を起さしむる實に吾人の棲息する地球の上に此くの如き地があつたかと思へば、其奇なる、其怪なる、吾人をして殆ど他の世界に徘徊せしむる如き念を生ぜしめる

此地よりしてウェッドリールの境なる北方より南方に進むと長く且つ奇なる凹道がツークールまで絶えず造られてある、平坦砥の如き地

は進むに隨つて其身の何處に到着するや其方針を解するに苦む位であつて、諸所に沈澱性の岩石横はり嘯小丘の起伏するのみで高丘のありし昔を想像せしむる位のものであつた、恐らくシムーン(沙漠に於ける大風)の力に依つて沙土を拂き去られて今日の如き有様に至つたに違ひないと信ぜられた

翌日即ち二十日である、我々は此道を去る事が出來ない、幸ひにして遙か此方なる曠原に鮮なる森の影を認める事が出來た、是がウェッドリールの第一の地である、之を名けてウールヒール及ヌシラと云ふて、此地には更に住民などはない、此ウールヒールの中央にはシヂェルムールリーファのクーバが建られてある、クーバと云ふ名は白き石灰を以て造られたる圓長形の紀念物であつて、即ち回々教の宣教師の墓である、正門を潜つて中に這入れば、其内部には此傳道師の長の墓があつて、其墓の周圍には旗や其他の供物が常に供へられてある、是は生ける宣

教師が遠き所より死せる傳道師の名を耳にして態々參詣する者の供へた物である、此の如き一の墓所は小丘の上に建られて、其處には清泉もあり又椰棗の小さき林などもあつて、何となく一種の風致を有つて居る是はアルヂェリヤに於ける最も奇なるものであつて、此くの如き事は地中海の沿岸よりサハラの最終點に到るまで諸所に見る所のものである、

此地を出發して數時間の後ムライエールと稱する所に到着した、是はウェッドリールに於てはツークールに亞ぎたる人家稠密の町である、其夜は此處の酋長の家に一夜を明した、ムライエールよりツークールに往く途中には諸所に林泉地がある、それゆゑに眼に映る風光も多少の變化がある爲に心を樂ませる事が出來る、此沙漠中を旅行するに就ては些々たる事までも我々の注意を惹くやうになつて來る、小石の如き物を初として佛を以て盛られたる小丘其他細小なる植物の如きは、

況もアルプス山を仰み、或は斷巖絶壁を望むが如き心地がする、殊に林泉地を越える時分には非常なる感じが起る、椰の木蔭より吹き來る涼風は勿論の事、淙々として流るゝ清泉は到る處憂さを忘れしめ、樣相や其他に反映する太陽の光は繁茂せる樹木の暗黑なる蔭を照して、鮮かに見せる、其他鳥の囀り蛙の聲などが耳を樂ませて、此沙漠の中に單調にして且つ妙味少なき一種の情趣を忘れしむるやうにする

此林泉地には其中央に一二軒の立派なる人家が佇立して居る所がある北家は必ず小さな丘の上に建られて、其家の周圍には壁を作つてある、而して樓を以て他の小丘との間の連絡を通じて居る、此家は窓もなければ又隙つて室内に煙筒もない、而して亞剌比亞風に席の上で寢もするし喰べもする、料理などは中庭でする、決故に厨などはない

予はクルーゼー大佐に一言謝さなければならぬ、決は氏が與へられた

る書簡はウェッドリールに到る處酋長より鄭重に我々を歓待する命令を記されてあつた一の紹介書である、それ故に宿泊所に到着するや騎兵は我許を去つて林泉地の林の中に影を隱す、而して十五分間も經つと酋長は我々を出迎ひに來る、之に隨ふ者は即ち住民の最なる者十數人である、亞剌比亞風の禮式をせんが爲めに我被の下に來て我手に接吻する、然る後我馬の轡を取つて、自分の家に導いて憩らせる間くすると、メルがと稱するものを以て香を付けたるクース、クースの大きな皿を持つて來る、それに付するに羅を以つてする、別に庖丁もあるのでなければ又肉匙もない、而して黄色なるスープの中に浸せる羊の大きな肉を予の前に出されたが手を付けられないには殆ど困却した、彼は予の困却した姿を見て、自身此中に手を入れて其中の最も大なる肉片を摑ひ、而して指を以て小さく切り初めた、是は最も我々に對する手厚き仕方であると云ふ話を後に至つて聞いた、之を喰べると其皿を直ちに予の護衛兵の所に持つて往く、護衛兵は予が前に端坐して、居つて、是

等が已幕の前に来ると餓虎が羊を喰ふ如くに喰ひ終る、是が済むと各々廂の上に座つて翌朝まで快眠を貪るのであつた

四日目我々はドラムター、アブルヤーと呼ばれたる硫黄石灰質砂山の山脈を越へた、之を越へるとアインルヒアンの清き泉は流れ樹木繁りし小丘に達した、此時予は二十人の騎兵に遭遇した、之と同時に駱駝隊が現はれた、其駱駝の背には鮮かなる色の片布を以て造られたる天幕様のものを張つて軟多き小包を付けて居つた、是は必ず有名なる人でなければならないと云ふ考を起した、果してブーカーと呼ぶ大酋長が遠征より已れが傳兵の幾分と兵器とを携へて帰る所であつた、其人は多少佛蘭西語を解するゆゑ、種々話を聞いた所、軍隊はツークールを出立したけれども、タメルトクヤマに行けば五箇の騎兵及七頭の駱駝が駐剳して居つて塞内者も居るゆゑにスーフの林泉地に住く便利を與へらるゝと云ふ話である

予はタメルヤに到着した、荷物はまだ着さないが予を去る餘り遠距離でないと云ふゆゑに此タメルヤの古蹟の中なる門邊に来るのを待つて居つた、此夜の愉快なる事は實に我眼には今日までも殘つて居る、予はタメルヤの酋長の家に招かれた、予が座せる席には酋長を初として二人の兄弟が侍して居つた、此兄弟は立派な男で容貌も怜悧であつて、顔色は黄色をして光ある白き色の片布を以て體を包んで嚴然として無言で居た、彼は予が恍惚として何か案じて居る事と信じたか予の考の邪魔をしないと云ふやうな風に見えた、或は此亞弗利加の夜の澄み渡れる光景に見惚れて居つたのか知らないが、何しろ其様子の美しきナカ〳〵歌羅巴人などが椅子や机に依つて足を伸して悠然として居るやうな姿とは遊ふ空氣も動かず、隨つて風もない、唯だ日没の涼しき風は時々徐ろに吹き来るのみである

渺茫たる沙漠海に於ける月輪が次第に登る盛栄は歌羅巴の如き霧深

き地に於て見るやうな黒色とは趣を異にして居る月輪と云ふても空に現はれた鮮かさ、又繁茂せる樹木の影を地上に照す明かさ、此沙漠に非ざれば斯くの如き壯觀を見る事は出來ないたらうと信じられる、加之此地は一鳥鳴かずして更に人間の囀きを聞かず其沈靜なる事世界に棲息するとは思はれない亞剌比亞風に建られた人家を初めとして諸處に散在せる椶櫚等の月光を帶びて其物凄さ一段である

此月光の鮮かなる間に一の荒れ果てた寺が見える、是は最も隆盛時代の紀念物であつて、今日は雨に打たれ、風に吹かれし後の僅のみを存して居る人は之を呼んで洪水以前より殘つて居るものだと云ふ、實に繪の如き亞剌比亞人の服裝を初めとして椶櫚の樹林其他建築物の奇妙なる形、宇宙の沈靜なる實に旅情を慰むるに足る如斯地が歐洲の文明の侵入する所を出てより三日或は四日の僅小日の地にあるとは考へられない位である

第三　沙漠中

翌日予はビスクラより附從せる護衛兵を歸らしめて、それより新に此地の護衛兵に護送されてムガランの林泉地に向つて出立したムガランよりツークールに往くには步行すれば三時間を要するのみである、から遠征隊は已に予よりも五日間も前進して居る、夫故予は直接にスーフの林泉地に入らむとして進んだ、夫故にツークールは有名に望むのみである、廿二日吾々はツェッドリールの東方山脈を越えんが爲めに早朝よりムガランを出立した、朝來より北目前に現はれたる砂は進むに從つて、層一層と高くなる、又小丘は次第に其數を增して來た、吾々はツェッドリールの住民さへも、サハラと呼ぶ所の四の沙漠中に侵入したのであつた、漸く進むに從つて四のアレッグの中に吾々は進入ることになつた、是に於て予は實に一種朦朧的に心を悼め、又何となく一

種の精神的不快を感ずるやうな心持になつて來た、即ちビスクラより
ツークールに至るまでの間と云ふものは沙漠である、又其沙漠中には
林泉地もある、併しながらそれは全く淋しき境でない、縦令林泉地がない
とて又行商隊に遭遇せずとて隨分數多き旅客等の足跡を發見すること
とは容易くあつた、併し此方へ來て見ると是と反對に林泉地も隨分多
くあるし、又行商隊も多數ある地上に在るものは砂ばかりでなく他の
物も隨分多いやうに見える、アルドゥテラム、ビッシンス、其他レタマな
どの食物は繁茂するのみならず、其他白鼠色なる蝮角のある海蛇を始
めとして玉蟲の種類は先づ此沙漠中の住民である蠍處に高丘は蜂ゆ
るけれども眼に觸れるものにそれのみであつて、此山を越えて、頂上に
往けば太洋と等しき沙漠を望むことである、實に此壯觀をして形容せ
しめたならば、如何に有名なる畫工の筆も到底此單調なる黒色と云ふ
ものを描くことは出來まいと思ふ、是等の高丘はエルグの高丘まで連

結して居つて、デュヴィリュ氏の說に依れば、其の間は千二百萬ヘクター
ル以内ではない、一方はハラダメーまで擴がつて居り、又一方はインサ
ラーまで擴がつて居つて北緯二十七度にまで及び、而してグーラ、の
劃線の所まで連結して居る、此線は即ち南方アルヂリヤと接合する所
の點である、是等の高丘は不規則に配置されて居るけれども、其形は規
則的の形をして或時は全く孤立して居るのもあるし、又或時は連續に
依て餘程長距離に延長して居るのもある、或るものは鳥飛の如く、或も
のは三角形頂の如く、若し砂に粘着性がなかつたならば、到底吾々は平
均を取つて歩行するなどゝ云ふことは出來ない、山背は帶黄色たる鼠
色を帶びて波狀的の班痕を殘して居る、恰も潮が退いたる後に、砂面に
殘す迹伏の如きものである、此高丘の間に眞の谿谷とも言ふべきもの
があつて長さは餘り長くないが非常に屈曲して、谷高丘の間に横はつ
て居る、其谷の極まりたる所から他の高丘が起つて、其谷を塞ぐが爲に

恰も螺の中の様な工合である亞弗利加人は之を靜脈が温同して綱の如くなつて居ると、其有様をば比較して居る

夫故に行商隊は二三の案内者がなければ、決して此沙漠を横断しない、此案内者は常に裸足で歩行するのである、是は最も必要なものであつて、恰も水先案内と同様な効力を持つて居るものである、此案内者はザハール（亞剌比亞語の鉢稱）と稱して所謂大人とか、高貴とか云ふ様な意味であつて、此社會に於ては一種獨立の待遇を受けて居る、彼等は實に其旅行の目的を遂する爲には掌中に一種の權利を握つて居る、又旅行者の安全不安全と云ふ者は實に彼等が左右する所のまゝである、若も旅客がサハラの高丘の間に迷入つてしまつて、井泉もなく、咽喉が渴いて堪えられなくなれば、名狀すべからざる所の苦しみに陷るのである、然るに彼等の聰明にして且つ銳敏なると、彼等の膂力の壯健なることは此處に記する必要もない、彼等は實に裸足のまゝで左右の高丘を飛び

超える恰も猿が木から木に傳はる様に、或は右に馳せ、或は左に走り、又數百迷も先に進んで、其地勢を觀察するに努める、彼は其往く先の地勢を案ずるのみならず、或時度窓子を以て行商隊に勇氣を附て、可成行商隊が無駄な道を通らずに、疲勞を增さないやうにすると云ふ工風をする、夫故に萬一休憩する時分は、是等の男は行商隊の步く三倍も步行する位であるから第一に彼等を歎待しなければならぬ、故に彼等は一握の粟と一杯の水を以て咽喉を濕ほす用に供して居る

ムがワンよりスーフに至る千百吉羅米突に四個の水溜場がある、第一がエルウイヘット、第二がムイヤ、エル、ブルッヤン、第三がムイヤ、エル、カイド、第四がムイヤハトマドである、此ムイヤ、ハトマドの南方ゾーアマールと云ふ所に清泉が二三あると云ふ事を聞いて居る、予は一日も早くと行程を急いで二日目の夕刻には是非共スーフの林泉地に到着しやうと思つたが爲に、此三個の水溜地を越えて、其夜はムイヤ、エル、カ

イドで宿らうとした然るに其日の午後一時頃激烈なる南風が吹き始めた天地は茫然黄ろく且つ暗色をして來た太陽も金色をして遂に砂塵の中に其影を隠して仕舞つた而して小丘の頂は恰も火山の噴火口より火焔を吹出すが如くに烟が立つて實に凄しい光景である次第に砂の渦が南方に起つて湯の如く殆ど四の渦の寄せ來る如く打かゝつて來る掩揚げられた小石は面部手足の別なく雨注して堪えられない眼は砂の爲に蔽はれて咫尺も辨じない咽喉は渴して人は暴さの爲に倒れやうとする餘義なく鞍の上に跨つて面を伏せて時々風の模樣を見て頭を擡げ呼吸をするのみで自分ながら生きて居るやら死んで居るやら判斷するに苦しむ位である夫故に斯の如き場合になると世の中の事凡ての善惡是非を辨じない只自分が心中に思ふ所は此風がなくなつたならば快よく路を往かれるであらうかどうだらうかと云ふ事を考へて居るのみであつた斯の如くして次第に歩を進めた漸く

谷を越えて風當りの少なき所に到着することが出來た其處には植て少なき植物が多少繁茂して居つて沙漠の中よりも除けられ易い所であつた此物らには豪ひ清泉があつて咽喉を潤すことが出來たが其清泉は即ちエルヘルヤンの清泉であつたウァッドスーフより左程遠くない所に水の流れがあつて深さは數メートルあるやうに見受けられたが水利の便を附くることを知らぬ爲めに其水が十分に流れない其日の五時頃になつて漸く暴風も歇んだ夫故に此地を出立するのは遲くなつた自分は翌日は是非共スーフの林泉地に到着したいと云ふ考を持て居つた故朝の三時頃に附從して來た者を起して月明を便つて旅程に上つた往來する駱駝の影は寂寞たる小丘の腹に描かれて何となく凄味を帶びて居る吾々は一語も發せずして倍々歩を進めた然るにバックマールと云ふ隊隊を導ひく所の大尉は暫々に止まれと云ふ命令を下した是と同時に高丘の上に白き

形が現はれた、即ち是は土民がツールーグに商品を持つて往く所の一隊であつた、斯の如き寂莫なる境涯に於て人間に遭遇すると云ふことは一の珍らしき出來事である、此者に會つて種々の樣子を聞いた所彼等は悦んで早々に此隊はタルズーの最も近傍なる入口に添ふて通つて居ると云ふことを話した

予は此日位い長い間疲勞を覺えた事はない、縱令旅舍に着いた所が美味なる晩餐もなく、好眞なる宿舍のあると云ふことは考へられない、殊に早々は此夜到着することは出來ないと云ふことを信じて居る間して引連れて來た獸類の如きは力盡きて將に仆れんとするばかりである、尖ゆる騎兵等も餘義なく馬より下りて歩行することになつた、自分も引連れた所の三匹の駱駝の中他の一頭に跨かることになつた、然るに三匹の中二匹は疲勞したものと見えて進むことを肯んじない、遂に自分も駱駝より下りなければならぬことになつた、午後五時頃になると七匹の駱駝の中四匹は跡に殘つて仕舞つた

さうすると暫々の案内者の一人はダルズーが見えたと叫んだ、予は非常に疲勞して殆と歩行は叶はぬ位であるけれども、此聲を聞いて吉報を叫けんだる所の案内者の居る山の上に登つて見ると果して東方に向つて何となく薄黑き所の丘を望むことが出來た、是よりして三時間ばかりも歩いて往くと開拓たる丘が眼の前に現はれた、是は何か高き植物の森であるだらうと思つて、話の中に近くに從つて見ると大樹の森である、今日まで旅行の間に見た所の樹などは實に矮小で樹木の形をして居らぬ、然るに此處は俱も十分に張つて居るし、なか〳〵大樹の有樣を成して居る、東南を望むと城壁が築かれてあつて、其城壁内には塔が聳えて其他墳墓などがある、父住民の間長形の家が無數に散在して、恰も蜂の巣のやうな工合に見えた、

是と同時に喇叭の聲は高丘の中より吹出された、此時位予は音樂を聞

いて樂しみを感じたことはない、殊に予は幼少よりして軍人的の教育も受けず、性質として軍人に適して居らぬけれども此音を聽いて潔しかつた胸も忽ち地爽快を覺えた實に砂漠たる沙漠の中に歐羅巴社會に於て聞く所の好調にして且つ剛曉たる音樂の音を聽かんとは、ゆめ知らなかつたのである、

吾々に附いて來た者の中に一人として佛蘭西語を讀す者はない、夫故に此處に來るまで、彼のツー、アクスの大酋長と言葉を交へたのみで他には一言たりとも口を利いた事はないのである、實に此長行程に無言の業をすると云ふことは實に自分も苦しく感ぜられた

第四　ウッドスーフ

ウッドスーフ州は幅員四五キロメートルより長さ四十キロメートルばかりなる帶の如き形をして居る、而して之が北部と南部の二つに別

たれてある北部は不等邊方形をなして其隅々にはしヒマ、ツグーム、ドビラ、シヂアウンの林泉地がある、又南部は四個の村落を有して居る、其名はゲマール、タルズー、クイナン、及此州の主府なるエルウッドと、此地を取り囲くエルハミック等で、此地方はウッドリールとは全然其趣を異にして居ると云ふ事は既に說いたが、彼の旅行者ドソール、及シャルマルタン氏等の如きはサハラを遊歷して沙漠の種類を三に區別した、第一に岡丘的沙漠、第二は侵蝕的沙漠、第三は砂土的沙漠で、是等は各々異つたる林泉地を含有して居る吾々は是等の有名なる地理學者が、天然の事を研究さるゝことに就て、吾々に意見を十分に開陳させて下さるならば、地理學上に於ては此沙漠を二つの種類に區劃することが出來ると信じられた即ち侵蝕的沙漠と岡丘的沙漠と云ふものゝ間に在る區別は、先づ取除けて宜いだらうと思ふ、モルターンの高丘又はウッド、ビスクラ、及ッドサハリーの內部を歩いて十分に觀察されたな

らば、此二つは全然相似て居る所を見出されるに違ひない、尖れのみならず、其年代に於ても甚しき差違なきものに違ひないと見受けられる。また硫酸石灰又は粘土の地層を初めとして小石や砂礫の如きものに被はれ其他歴史以前に於てアトラス山より流出せる潮水の爲に浸されたる形跡などは歴々として此兩方の沙漠に於て見ることが出來る、又林泉地を見濟した所で、此兩沙漠中に在る林泉地を區別するは甚だ難い、殆ど齟齬を同じくして居る、ビスクラに漫遊したる所の旅行者、又其他沙土的沙漠中で進む者を排たゞ漫遊者の如きは、其探險的目的をもう一層進めると云ふことは見出さないのである、ツーグールに至るまで、否ウァルグラに至るまで日に觸るゝものは、波動的平原と、小石質、且つ鹽性質、又は植物上に於ては棕榈等に繼續する森林等を初として、同樣料を以て、同形躰に作られたる村落などは勿論耕作の模樣其他水利（但し林泉地を除き例ばスーフの如きは河水を引いて飲料水に供し居れ

ど、ウ、ッドリールの邊に於ては清泉地より進しり落ちるの如き總て同一、有樣を呈して居る、今此水利上に就ての種類を陳べると云ふことは餘程必要な事である、地理學上に於て之を二つに區別したことは十分に配慮して置かなければならぬことである一たゞアレッゲに足を入れたならば、初めて宇宙の變遷の著しいのを見受ける、地面の凹凸岩石の組織、天象の有樣、水利の方法、耕作の手段、庭園の配置、其他家屋の建築總て斯の如き人工に關するものと、天然に關するものとは一の新現象を呈する故に其違つて居る有樣は、茲に如何なる形容詞を以て說明して宜いかに苦しむ位である、

スーフの林泉地に於ては到る處極めて淺き地中より水が湧出する、併ながら決して進しり出ると云ふやうなものではない、故に各其地に依て異つて居るけれども、先づ、四米突より十迷の深さのものと埋り、其非戸を飾る鹽梅は一の奇觀を呈するのみならず、其幼稚なるには驚くの

外はない、水桶は牡の野牛の皮袋であつて、十リットルか十二リットル位の水を入れることが出來る、而して綱の一方に石を附けて、これを重りとして其石の權衡を利用して水を汲み上げるやうにしてある、此非手の物に水桶がある、其水溜に入れる水は棕梠の極く嫩い時節に潦渡するだけの必要に取つて居る、棕梠が成長した時分には自然の水で成長することになる、夫故は水溜の水を使ふ必要がない、此スーフだけに於て五萬本ばかりの棕梠がある、而して一本の價値が二百法より二百五十法(即ち我が八十四乃至百四)である、其他砂糖、薬味ある野菜はアルヴリヤ邊に於ては一般に好まれて居る一年に此一本の樹より十法乃至二十法の金を得られるのである

スーフに於ては耕作をすると云ふても、非常な勞働、忍耐をしなければ自分を養ふ事も出來ない、ツッドリールの如きは隨分種々な便利も得られるけれども、スーフに來ると耕作其他の事に就て非常な勞働をしなければならぬと云ふのは外ではない、則ち砂と戰はなければならぬのである、其砂の可成攻寄せないやうに防禦を講じなければならぬ殊に地面が狹少であるから植物に十分な保護を與へない以上は、一時に猛砂となつて住居はなければならぬ、今相應なる高丘の中央に適當な地面があると、住民は其地下水脈のある所まで大約一米突から二米突まで堀り下げ、其堀りたる砂を傍らの高き所に積上げる、斯くすると、其周圍に自然壁か築き上げられる、其砂を以て築かれたる壁の上にグリットと稱する棕梠の枝を以て造つた塀を拵える、然るに風の爲に外から漠ふて來る砂が激しく、到底一つの壁を以て堪へられない事がある、其時分には、第一者より少し下つた所に第二の壁を作る、斯の如くして次第に其地面を堀つて耕作地を擴げやうとする、併し斯くまで辛苦するけれども、一朝人力の及ばぬ所の颶風でも起ると、瞬時にして外から來る所の砂の爲に自分の畑を埋められて住居ふから、土民などは

必死の力を以て之と闘はなければならぬ是等の爲に棕梠などは砂を被つて枯死するやうなことになる是を防ぐ爲には又奇妙な一の方法を執る、夫は砂が深くなつて來ると地を深く堀つて、棕梠の上部の根を倒いで堀つた所を埋めて置く、所くして培養して居る中に樹が枯れなければ其棕梠の樹を救ふことが出來る、夫故に庭と云ふやうな所は六米突より十二米突の深さの所に造られてある、加之此庭に植えられた棕梠の種類は十種もある又水利の便なる所には烟草・胡麻・葡萄・赤茄子などの種類が深山繁殖する

此村などは高丘の間の多居間地の上に立てられてある、其家の有樣は一般に四角なる内庭と云ふやうなものがあつて、其一方は長廊下が造られてある、三方は自分等の寢室及食堂、其他倉庫などを建てゝある、其庭の中央には駱駝の毛で拵えた天幕が懸かれてある倉庫の中には農作には除る緊要ならざる物を置くやうになつて居る、それは二米突以

上の高さであつて何となく一種の妙な形をして居る、連鎖思想などは極めて單純なものであるから、予が此事に就て問ふた時、北人は成るべく材木を節減する爲に單純なものを拵えて滿足しなければならぬと云ふ事を答へた、此居室の後方には外庭のやうなものがあつて、其處にはシンリットが作られてある、入口の戸なども重に棕梠の簀子である、偶々棕梠の枝などを以て拵えたものもあるけれども、是は非常な贅澤な事になつて居る、蓋し一本の樹も非常な價値を有して居るのに、其樹を拵いて使用するのであるから無論一種の奢りと言はなければならぬ、而してスープの連鎖と云ふものは硫黄質の粘土をもつて來て、別に精選もせず家々の壁などにする、家の中に一種の奇妙な事がある、夫は家内には必ず悪魔除の爲に羊の角とか駱駝の骸骨の如き物を掲げる、是が悪除の神樣であるのである

ウァッドスースの人口は二萬五千ばかりだと云ふことであるが、フルー

ドと云ふ一つの種類があつて、先づ三分二以上は此人種で、其他の種類はアヂアン、及スーフ等で、是等は猶太人などの一種か混じて居るやうに見受けられる、アヂアンは耕作事業に大變注意して居つて、或は農夫となり、或は人の僕となつて頻りに働いて居る、夫れのみならず、一方には牧畜などは勿論、運輸の事業に就ては專有權を持つて居る、彼は此外にスーフ全州を果けて商賣を爲して居る、ア毛織業に從事して居る者は四千人もあり、年々出來る類は百萬法に及ぶと云ふことである、又人口が非常に殖える、ビスクラ、セヂビットなども其通りであつて、殆ど生活上に平均が取れない位な殖方である、夫故傳聞スーフ州の者はチニシーとかテルなどの村へ移住して、或は鍛冶屋とか大工とか若くは小使などの職業に就いて其日を送つて居るやうになる、此人間は自分の故郷と云ふ事を思ふことの厚き人間であつて、金が出來、又貴產を造り、故郷へ歸つてからの生活が出來ることになると、必ず歸鄉する斯の如く

自分の故郷を去る他鄉に流浪して來たから定めし考へなども他鄉に勸化されて來るかと思ふと、矢張頑として昔日の如く、其臆膽と云ふものは一向亂されない、諸君がアルヂリヤとか或はコンスタンチーメ、アクビヤ人の村などを御覽になれば分ることであるが彼等の歐羅巴を廻り外國の風俗などを十分に觀察して居りながら、其國へ歸つて來ると決して歐羅巴の風俗などを模倣ない、又言語も外國語を習はない、彼は寧ろ歐羅巴を歩いて歸つて來る時分にどうするかと云ふと、歸途にメックに行者として參詣をして、さうして不潔不淨の地を歩いたと云ふので齋戒沐浴して、自分の國へ歸ると云ふ位であるから、他國の風俗が是等の人間に這入らふ等がない、殊に自分の國へ即ちハ、ゲと稱へて行者となつて歸つて來ると、大層權力もあるやうになり、從つて人望も良くなつて幾人となく妻を持つて、織物業の爲めに働き、それから又黑奴の賣買をする、彼等の職業としては面白く世を送ることが出來るので

ある、

ッルーに於ては冬の間より外此處に居らぬ筈になると、近傍の村落に幕を張つて住む極く貧い中は自分の牧畜場の區別を必ずアコーヤや又はトリポリタインの牧畜場に持つて往つて住む群々が此地に往つた時分は冬の終りであつたから、人民も多少は居つたけれども彼等は未だ遠から先自分の處に就ては更に何たる力油も講じないやうであつた、佛蘭西の軍隊が近いて來るに從つて、彼等は天幕を撤して何れへか退去し初めた樣子に見えた

第五　ウリッドスーフ林泉地に於ける行軍

予が此地に着きて滯留する間は總督より實に懇篤なる待遇を受けた此くの如き待遇は予が今日まで實に幾多の旅行中未だ嘗て受けた事のない、最も丁寧なる、最も情誼ある、記憶すべき大歡迎であつたのみならず、又此に特筆大書して此將官連に謝さなければならない

サハラの遠征軍に附從して此地を跋渉する軍人中の文學者等は、頻に筆を執つて此有樣を記されたが、予の眼を以て之を判じたならば、未だ充分に筆力が及んで居らぬと云ふ事を明言することが出來る、予の如きは此地へ來て最大なる便利を與へられた故、隨つて斯くの如き地に在りながら充分の食を得る事も出來た、無論巴里倫敦の如くに事物が整頓して居つて總て意の如くになると云ふ譯にはゆかないが、長い間艱難辛苦を爲し、疲勞に疲勞を重ね、漸く此地へ到着して見ると、非常に快適と云ふものは實に樂土へ來たやうな心持がした、

到着の翌日、予は二三の士官とタルゾー及クマールの村落を逍遙した

同營地より此地へ往くには土民等の設立して居る臨時的の市場を通過しなければならない、此市は詰り遠征軍の爲に設けられたものであつて、兵卒は此土民の住居して居る所へは決して一個人で行くことは

出来ない隊を組んで往くことは許可さるゝのである、其一班の有様を見るに商人は種々な荷物を地上に并べて其前に屈んで居る又は荷物を自分の腕に抱へながら軍人の中に立つて頻に賣捌かんとして居るのもある、其價は隨分馬鹿に高く非常に高價な事がある、洋だとか又は家禽、菜野、其他柘榴、水瓜、瓜類等總てチュニスから行商隊が持つて來る所の物品は此市場に於て賣り潰されるのである、

又向ふの森では珈琲店などが出來て居つて太鼓の音に合はして樂を奏し好眞なる飲料品を客に呈して居る、我々は如何にも低き森の下を通りて此村に這入つた、此處を歩るくにも森の低い爲に我は殆ど馬の背に伏して體を撓げる事が出來ない位である、サハラの門戸を潛らうとするには、どうしても斯うしなければ這入る事が出來ない、若も之を忘れて呆然として居ると是が爲めに非常な負傷をすることがある

と云ふ話である、自分の如きも氣の付かない中に馬が此低い門戸を潛らうとして甚く頭を打つたが幸にして厚い麥藁の帽子を被つて居つた爲め別に負傷をしなかつた

タルゾーには三百軒の家よりない、其隣りのグマールの方が著しく戸數が多い、人口は四千五百人、戸數は八百戸ある、加之十二の回々教の寺院、四ツのザウヤアスがある、之に就いてフーローと云ふ人が記したる宗教史のやうなものがあるが、ケマールでは古代のサユッヤを代表して居ッて耶蘇教信者が多く往つて居つた地である、加之此回々教徒が侵入して來る後ど雖も耶蘇教を信仰する念は非常に殘つて居つたと云ふことが書いてある、今日は耶蘇教徒は地を拂つて唯だ單に回々教徒のみであつて耶ち猶太人が多く居るやうに見受けられる、我々が此地へ行つたを機として猶太人種等は軍隊に向つて猶太協會を建てることを請ふた其歎願と云ふものは直ちに許可されて、彼等の悦びは非

常であつたやうに見受けた

我々が先つ第一に經過したる村内の有様を見るに總て古代の破壊されたのが多い、此の如き悽れなる有様に陥つたのは前年の叛乱の爲めである、

スーフの村落は各々孤立して互に親交を結ぶ事なく各村落實に野蠻を極めて常に干戈を交へ血の雨を降らす事が絶まないのみならず互に攻撃し又兵營の事を忘りもしない、一方はエルッッドブビヲ、タマール等が相連結し、又一方はクイッンズゲーム、タルヂー等が一致して居る、第一の方は一種の同盟を形づくつて居つて即ちトマサンの同盟と云ふても宜しい位である、彼の方は即ちツークール同盟である

千八百七十一年アルヂェリヤの暴徒の間に意見を異にする者が湧き出して遂に遂に爲に慘憺たる結果を惹き起すやうになつた、ブーチュシヤとトマサンの爲に退けられたが、ツークールは之を歓迎した而し

てケマールは實に勇氣ある兵を以て之に反對を試みた、第一戰に於て彼に敗を取つた爲に一種の軍略を講じて兩個の關係を断たうとした彼等の引き連れた兵は市街の北方に向つて激烈なる戰を試みた、此戰爭を挑まれたが此處を守つて居る所の兵卒等は兵數の多きを恃み鬨を出でゝ一戰の下に之を打ち破らんとするこゝに掛つた、然るに敵の騎兵は反對の側より襲ふて來て防戰者の空居を衝いた然れども率にして來襲者は亞剌北亞の流族として彼の通行の道路に於ける土民等を掠奪し又脅迫することをしなかつた、前方に於ける敵の歩兵と戰つた者は遂に之を退け其勢ひを以て反つて來て、後より襲ふて來た騎兵を粉微塵に打砕かんとした、斯くする中此敵將なるブーチュレヤはエルッッドの住民等が北敵の爲に援に來た事を聞いて、遂にクイナンの力に兵を引上げた而してツークール及びウァルゲラに退ひた

此の衝に衝突して居る所の家と云ふものはタルッーに於けるが如く

立派でもなく又高層でもない而して屢々見る所のものは非常に大なる宮殿的の物が建られてあるのである、それ等は彼の亞剌非亞物語に於て見るものと更に違ひなくて無論破碎物である故に今日は見る影もなく雨露に曝されて唯だ昔の壯大なりし俤を遺すに過ぎない併ながら一見以て東洋風の建築を髣髴たものであると云ふことが分る是即ち前にも記したサハラアと云ふものであつて一種の宗教的の建築物で中世紀に於ける歐羅巴の大伽藍に比較すべきものである、其目的としても其權力としても殆ど同樣である、加之當に寺僧を置くに止らず一方には學校ともなり病院ともなる、グスポー氏の言ふ所に依れば同々教徒が勢ひを得て戰勝者となる場合に於ては此處は一の城壁と云ふべきものであつて、此處へ神聖なる信者が來て回々教徒に反對した所謂彼に對しては宗教的神の敵を打ち碎かん爲め此處で祈禱をする所であつた、彼のコーラン教が出來た時分にサハラアは戰に對

する勢力は減じたと云ふ事が書いてある、今日では此處が一の王國を見たやうな驕梅で何事か起つた場合には此處に來つて命令に服すると云ふやうな、一の教育を薫陶すべき所にもなつて居る、ケヤールのザウアスはアッヤニーの命令の下に服するが、是はトマサンを中央として其魁長としてはマホメットアニューテルアイトが此處の長となつて居る、此サハラアスへ我々を導いて非常に歓待をしたのはアニューグルアイドのザヤ、アルと云ふ人であつた、此人はツークールよりして非常に儀式的なる行列をして來たと云ふ話である、着物は空色なる紐の着物を着け、丈長く顏の色は一種の黴味を帶びて何となく凄く見える、此人は第一に我々を其寺院に導いた、其寺院の樣といふものは金泥を以て描かれたる亞剌北亞の經典を記されてある、其敷石は總て漆を以て塗られたる四角な陶器で張詰められて、總ての有樣の嚴然なる事と其裝飾の趣向に富んで居る事は一目瞭然とし

て居る位である殊に驚くべきは即ち酋長の書斎であつて實に驚嘆を極めて居る、内庭には石の廊下があつて、此廊下に進てたる獸の如きも美術的に種々な物が彫刻してある、廊下の下には大なる室がある、其處には綿の毛龍が敷かれてあり室内には金絲を以て刺繍されたる枕駝鳥の卵を以て造られたる物或は棕梠の木を以て作られたる机を初として、歐羅巴風の長椅子其他種々の道具は所狹きまでに並べてある、其處で休憩すると、先づ持て來る物は、茶と珈琲である、我々はそれを喫して後ち室外に出た、此處には一の大きな塔が立つて居る、而して棕梠は日光を遮ぎる程植え付られてある、此塔へ昇ると全市の壯觀は總て眼中に映じて來る

翌日は南方スーフを見る爲に一分隊を派遣さるゝ事になつた、其一分隊はクルツーに陣營を張つて居る將軍ガリッフェー侯は遠征軍の爲に送つた所の支隊の司令長官となつて居つたが、歸つて來られて、手が南

方スーフの林泉地へ赴く遠征隊に附屬して旅行する許可を與へられた、それ故我々は翌日未明に此地を出立した、我々に隨つて來たのは亞弗利加狩獵隊の第三聯隊である、一聯隊はシャルトル公爵の命令の下に在るもので、此人は是等の沙漠中に於て實に非常なる功名を現はした人である、其他の軍隊の長は即ち夜來より我々を歡迎したシャーフを初としてシクルビー即ちウッリッフスーフの貴族である其他ツークール分隊であつて騎兵の中には土民の騎兵なども交つて居る、我々の携帶せる荷物は極く緊要なものであつて極く僅かなものである、兵卒共は雨露を凌ぐに足る丈けの用意をして居つた、唯だ我々と共に往きたる貴族は亞剌北亞風の大きな天幕を持て行つたが此天幕の下には遠征隊の士官丈は充分に入る事が出來る大きさであつた、斯くの如くして二日間の中にツグーム、ドビラ、ンダッツン、ビロマなどの林泉地を見ることが出來た、之を見るには隨分高丘があつて我々の前進を妨げ

たが、それにも拘らず往く事が出來た佛蘭西の軍隊がツーグールを發してスーフに來る時分に到る所の反亂は先つ鎮靜に歸した併ながら此鎮靜は一事の事であつて充分に是等の人民を服從さするには到底佛國の銳利なる武器を以て彼等を打擊し、佛國はアルヂエリヤの保護國であると云ふ事を示して充分の威力を見せぬ以上は容易に服從の意を表さないのである、それのみならず此叛亂者を以、最も嚴密なる猛戒をなし彼等をして將來徒らに干戈を弄する事のないやうにしなければならない、又今まで徵收されない稅なども充分に取立てなければならぬ、且つ不忠實にして抵抗し易き酋長の如きは總て更迭して、今まで居つた所の各州自ら任じた酋長をば黜ぞけ、是よりは政府よりして人民を壓倒するに足る丈のものを置かなければならぬのである、斯くの如き事をするには兵力を借りて充分に彼等を脅迫しなければならぬ併ながら斯かる國へ向つて遠征隊を派遣するには非常に費用も掛

るし又非常な困難を排斥し之に打ち勝つ決心がなければならぬ軍隊が經過した處の人民は非常なる苦痛を感ずるのである、譬へばの如き以前の十倍も增す、即ち獵獵期一遍に就て十サンチームの稅を課せられる、それ故に林泉地の如きは一人宛三十フラン位の稅を拂はなければならぬ予の如きは此金が彼に出來るかを危んだ位である、此處に居つて稅を納むる事になると、彼等は間違なく、それ丈けの金を以つて來る、遂には租稅金庫の半は佛蘭西の金で充されることになつた此租稅に徵收する金は佛蘭西の金もあるがクニューの金も又た西班牙の金も混つて落つたのである

此沙漠場に於ける戰は實に古代の戰であつて所謂幼稚なる戰をすることは分るだらうと思ふ、是と同時に我々が南方スーフに向つて遠征して種々な有樣を見るに、宛もエロドット又はヂットソーンに匹敵する遠征軍の狀況を想ひ出させるのである、各村落に往くと或一定の距

離に於て白髪老人の團隊が進んで來るのを見る、是等は將軍の前に來て、靴或は鞍などに接吻し、奇妙な聲を以て、汝が爲に尊敬の意を表す、汝は天帝の子、平和の王である、國王の使者である、我々は實に滿腔の敬意を表するのである、神は汝の生命の無窮なる事を許すに違ひない、又汝の爲に戰捷を與へるに相違ないと斯ういふ言ふいふ、將軍は一々斯くの如き事を聞いて居る暇がない、それゆゑ極く簡短に嚴格なる詔を以て是等の老人に挨拶をした、此通弊はシュルビーと云ふ貴族がされたのである、彼等の老人は如何にも滿足の意を表した後林泉地の方に歸つて往つた併ながら彼等は此シマヘアルを見、其靴などに接吻をして去るのである、ダマヘアルは始終軍隊の中央に居つて非常に奇麗に粧ふた馬に乘つて如何にも容儀を正して居つた

城壁の下に到着すると我々は優然とせる人民等が居るのを見た或は城壁の上にも居るし、或は家の前なる廣場に集つて居る、又は山の下などに居る而して熱心に我々の近入つて來るのを歡迎して如何にも今日までの卿を謝するといふ樣子である、ツークールに行つた時分に我々は婦人の團隊が遠か隔つた高丘の上に居つたのを見た、而して我々の方を向いて頻に禮讃を表して居る、サハラの沙漠を旅行する間に婦人が外國人に對して公の仕事をするのを見たのは是が嚆矢である。此邊の土民等の女と云ふものは亞剌比亞人の社會に於けるものとは全く例を異にして居つて非常に自由に且つ一種の權力を有つて居つて其身を處する自由に且つ一種の權力を有つて居る、此有樣を見て予は深く其事の適切なる事を知つた、フェロー氏が語つた話にタルソー及グーマルンの間に戰が起つて互に平戈を弄するに際しては婦人も部伍の中に加はつて頻に働くと云ふ事である、其婦人は決して兩者の間に立つて此事を和めやう或は平穩に歸せしめやうと云ふ考ではなく、充分に戰鬪が出來るやうな事をなすのである、併ながら是等

の婦人は決して武器を持たない彼等は水に浸したる脂肪液を其敵に向つて注ぎかけるのである

佛蘭西の軍隊が城壁の下に往つた時分に將軍は酋長初め其他の貴族などを呼び寄せ市内の狀況に就て會議を開く爲に或場所に會合をされた、此間士官等は兵卒等の駐在地を定めるとか、或は警戒を加へると云ふやうな事に盡力し、又土民等は義捐金として而して牽を屠つて軍隊の供給に充てる事に奔走をする、彼々食事の時刻になると、子供や男が一の長き隊を成して頭の上にクース〳〵の煙出したる陶き皿や瓢の鉢などを捧げて出て來る、先づ第一に其中の頭と云ふやうな者が手に杖を持ち道の邪魔をさせないやうに雜踏を防いで居る、是が濟むと皆其皿を持つて歸る士官等は自分の天幕の内で食事をする併し椅子がない爲に其處に座つて喰べるのであるが其處には厚き毛氈が敷いてある、此處では羊の外種々な家畜類があつて總てクース〳〵の法で

一種の辛き料理法を以て料理されてある、先づ食物に就て一言すれば沙漠に生ずる鴕鳥の卵のオムレット、若棕榈のサラド、蝗の燒き物是等が珍膳佳肴となつて我々の口に上つたのである

斯くの如くして居る間に時々驚くべき騷動が初まる是は何かと云ふと今まで捕へた虜人を釋放する時の騷ぎである、今一ッは軍隊に向つて何か歡迎をしやうと思つて出掛ける人民等の團隊が大聲に叫ぶ聲である

ビヒヤに於て我々は酋長の交代をすべき儀式に列した、之には何か一つの騷動が起るに違ひないと云ふ事を期して居つた前の酋長は痩小なる老人であつて斯くの如き事に及ぼふと云ふ事は夢知らなかつたやうである、兵隊が來て而して司令長官の演說を酷譯して聞かすに、其無能力を論究し、其職より退かしめん事を宣告した、彼は黑く燒けたる顏の色を青くして暫く悄然として居つたが再び色を作して而して一

種様なる態度を爲しつゝ奇なる聲を發した、彼は如何なる騒動が此市以外にあつたと云ふことは殆ど知らない樣子である、此命令が濟むと、一人の士官は彼等の傍に進んで酋長の着物を剝ぎ、其着物を此相續者の肩に着せた初めはそれを着るを拒んだが則々敬の性質として忽ち眼中に一種の悦びを呈して、遂に之を受けることになつた、彼は其土民の頭に之を捲ふた、而して自分の監督すべき所の村落に進入つた、此祝祭を聞いて失敗者は悄々として居所の羊の如く自分の家に歸つた縱令東洋とはいへ不公平なる政治、不德義なる事は決して古有物ではない併しながら東洋に限らず到る處斯くの如き惡風は諸所に傳播して居るのである

第六　エルジャッド市

二十七日の夕刻に、我々はタルズー總督府へ歸つて來た、其翌日諸分隊

はクィナニの林泉地に向つて進行を始めた、サハラの沙漠中の陣營を撤去する有樣は、如何なる奇術者も恐らく之を寫すことが出來ぬ位の珍色である幾個となしの天幕を縮めて荷物の外覆にし、各々帶嚢を提げて出發の用意は整頓した時に劈曉たる喇叭の音は羊の啼く聲と共に起る馬の嘶きは無數の駱駝の聲と相和して耳朶を打つ、土民等の赤き着物は、駱駝丁の白き衣服と相交つて眼に映ずる彼方此方には十二三人の隊を作つて未だ日も昇らぬ前に火を焚いて明を取つたのが燃えきらずして、尙ほ其炎を曉風殘月の虛に殘して居る、いよ〳〵合圖の喇叭が鳴ると、先づ第一に喇叭を持つたる土民は路案内として先に出發する續いて總督は參謀官及び土民兵の二三を連れて進まれる其後に步兵、此步兵の中には土民兵も加つて居る、中部には看護隊、又は驢馬などが居つて、山砲を二臺引き連れて居る騎兵は兩翼となつて駱駝隊に續く、影暗き曉の空何となく物凄く、隊を揃へて進んで往つたが、其

進行の遲いことと歎くの外はない、其進む距離は少ないけれども、彼等は非常に疲勞をする殊に荷物などを持つて居るから一層苦しむやうに見える而して此時予はムクランからスーフに往く道で二つの林泉地の間が少し長かつたが爲に四分の三以上の荷物を一時取り除けなければならぬやうな事になつた、今度は此處を山立しクィナンに往くに七キロメートルの里程がある、其た少距離であるのに、其處に到着するに三時間を費した、實に歎くばかりである、クィナンと云ふ處には三百以上の家屋があつて、二千以上の住民がある、此處は一大高丘の斜面的の所に立てられたる町で、ウァットスーフの最も絶景の處である、周圍は石を以て築かれたる塀を以て厳はれて町は極く狹く正面を遣入つて見ると實に市内の形勢の慘然たるに一驚するの外はない、到る所崩されて到る所壞されて、今迄見たことのない程の悽れなる姿をして居る、クィナンに滯留したのは一日であつた、二十八日に我々はエルウァッド

に向つて進行した、即ち此處より五哩迷の地である、エルウァッドはスーフの首府である、此所はアルジェリヤに於て現在ラダメー、ダークレッグスータンに行商隊を送り出す最後の中心點である、此地はサハラの沙漠中最も富裕にして、且つ立派な所であると云ふ者多を博して居る、此處には酋長と云ふやうな者は五人以上あつて、彼は我々がクィナンを發してより半途の所に己が手下の者を率ゐて小丘の上に待つて居つて風に旗を靡かせつゝ我々の一行を迎へた、公報の統計に據ると此處には八萬より十萬人の人口があると云ふことを聞いた、而して此町の長さは九キロメートルに達すると云ふことである、

我々は實に一の歎くべき事に遭遇した、また一の落膽にも遭遇した、それは數多の小丘を越えて、我々が既に遠征隊と共に漫遊したる所の村落の形勢と殆と迚はぬ風景の前に現はれた、只我々の眼前に、淋しき光景の間から突前現はれたのは一の回々教の高塔と、二層樓の寺院位のもの

であつた、成程エルウァッドは沙漠中の最も人口の多い町と云ふとは人から聞いた通り事實であつたが、併ながら大部分は水草を追ふて移るやうな無定住の住民のみである、我々が此處へ來るのを見ると忽ち此の處を去ると云ふやうな工合であつた、加之らずエルウァッドの名前はエルハミックと云ふ村まで擴がつて居る、花漢たる所までも此名を附けてあつて南方は殆と九キロメートルに亘る、斯の如くであるから家の數が千以上に上ると云ふのは無理でない、此村は東北の隅に二つの市場を有して居る、一は城門外で別に家屋の建設もされてない、即ち野原に於て行はれるものである、其の一は城内に在つて、市場はチュニス人が所有する店舗を以て形つくられてある

同部のやうな物があるが、是は大酋長に附屬するもので、東南に建てられてある而して城壁の堅固なことは稀に見る所のもので、庭は非常に敷が多いけれども、先づ一番なのは城ばかりであつて他に見るべき

ものはない、先にも話した通り、回々教徒の高塔は一の高丘の中央に建てられて嚴然と空に聳えて居る此邊では一向羅馬人が襲撃して來たと云ふ痕跡を認めない、併ながら人類學者が此邊を探險した結果に據ると羅馬人はラダメーの邊まで進むたのみならず、アイル即ちスーダン國の國境まで襲ふたと云ふことは歴然として居るとの事である、エルウァッドの人民は我軍隊に千五百頭の駱駝を購求しなければならぬといふ命令を蒙つて居つた然るに我々が到着した自分は其半分にも充たない、蓋し是は冒險の行違ひであるか、或は故意に斯の如くしたものであるか、其邊は分らない、夫が爲に軍隊は盲ふのに、若も命じただけの駱駝を出すことが出來なければ其駱駝を得るまでは、軍隊の糧食を十分に出し、且つ日々に莫大なる料料を出させると云ふ命令を下した斯の如き命令が下つたが故に彼等は非常に驚いて使者を無定住者の許に發して、彼等の持つて居る所の駱駝を總て買ひ集めることにした

然るに無定住者は一向常住者の苦しみなどには氣が附かないものだから中々千五百匹の駱駝を募ることは六ヶ敷い、尖故にエルウァッドの城壁の下に七日間を費すことになつた、而して得る所の駱駝は千五百は愚か僅か百にも足りない

此地では間を隔むるに就て何も見るものがない餘義なく將官と共にエルハミック庭園まで遊逍したことがある、此林泉地は僅かに杖を突くに足るべき所であつて殆ど見るべき所はないけれども、是とても回教徒地を離れるには二三人相伍して往かなければ危險である加之沙漠中を遊逍するなどに就ては更に愉快と云ふことはない、縱令馬で往かうが步行しやうが至る所眼に映ずるものは只單調なる光景のみであつて更に變化と云ふものがないから、而白味が薄い、尖故餘義なく予の如きは日を過さんが爲めに城内を漫步する位のものである、亞剌比亞人の部落に於ては各々其職業に依て各個獨立なる職に從事して居る、エ

ルウァッドは殊に銀工が多い予は時々是等の店舗に足を停めて、彼等が能く忍耐し、且つ彼等の技倆に就て長たて居る所を歎賞した事がある尖れのみならず予は時としてはアニス人の小間物商店を度々見廻つたことがある、其處には土耳の行商隊が持ち來る所の奇妙なる物品がある、チニスの棕櫚とか、駝鳥の卵とか、其羽とか、ツーアレッグの武器とか、或は家具とか、ツーダンの織物とか、或は香水などと云ふものがある然るに不幸にして前年の反亂の爲に、一時此商業の潮流の方針を變へたが如く見える、又一方に於ては軍隊を恐れること甚だしく、或は掠奪にも遭はむかと云ふ考へから貴重なる物品などは總て隱して仕舞つた、殊に彼等が使用する所の武器などは地を拂つて見ることが出來ない、漸く軍隊が着してから三日目の終りに初めてツーアレッグの二三の武器が市場の天幕の下に曝れたのを見た位である、此事が現れるが否や將官共は紀念として買はむとすると忽ちにして黙くべき高價に

腦つて仕舞つた

八日間ばかり滯在して、遂に軍隊はカリフォー將軍の指揮の下に進軍を始めて東北の方向に向つて進んだ、而してチニヤーの國境邊に於て徒に安眠を貪る所の無定住の人民を懲かさんと云ふ計畫をした、予は喜んで此遠征軍に隨從することを願つたけれども、暑が旅行の期日と云ふものは豫め期した日限よりも延長して居るが爲に其行を見合はせることに至つたのみならず、予はビスクラへ歸へらずにツーグールの方へ往きたいと云ふ考を有して居つた然るに幸ひにして、行商隊の一部がツエドリールの方に往くと云ふことを聞いた故に、予は此行商隊と共に北方向に進むと云ふ許しを受けた夫故に予は此處まで來たる所の騎兵隊の將官等に暇を乞げて、三月三日の朝彼等と袂を別つことになつた

予は翌日出立することになつたが、此間に一の飈風が起つて實に吾々

をして不幸に陷らしめた、予が天幕は騎兵隊の陣營地なる市中の單獨なる高丘の上に置かれた、即ち市街と彼の陣營地との中央に位して居つた高き所にあるが爲に、無色も從つて好く一方は市街を眺め、或は寺院などの際を見られる、又一方に於ては陣營地を望んで居る、其有樣の美しきこと、殊に太陽が西に沒せんとする時分に、天は紫色を呈して、日影は一面金色の光を放ち、沙漠中諸處の林泉地に繁茂せる樣相の樹と何となく薄暗く反映する、驚嘆は實に得もいはれぬ光景である、此邊では日の暮れ初めるのが非常に早い、總督府の喇叭の聲が起ると同時に諸處の陣營地に於ても太鼓を初めとして、喇叭や其他の音樂の音が風に吹き送られつゝ聞える、又是と同時に篝火は諸處に點じられて、吾々此に至つて初めて篝火の下に終日の勞を慰すことが出來る、遙かに聞える駱駝の諸方に咆ぶく聲などは、此靜かなる世界を破つて何もなく他鄉にある旅情を高めるやうに感んぜられる

若し此天幕が堅固に構造されてゐたならば、予は喜んで此颶風の中に起つて觀測することが出來たのであらう、然るに砂上ではなか〳〵天幕を動かぬやうに張ることは難いのである、夫故に天幕を堅く張らうとすれば、森の中に建てゝ而して大きな石を以て留めるやうにしなければならぬ、それでさへも十分ではない丁度午前二時か三時頃の事であつたが、いよ〳〵颶風は吹き初めて、天幕の煽らるゝことは實に非常なものである、余は眼を覺まして、蠟燭に火を點ぜんとして床を起き上がつた風の勢は一層激しく天幕は將に風の爲に拔ち去られんとするばかりである、予が起き上がつて床を出る一刹那、天幕を支へる所の木が予が立ち去つた深雪の上に墜落した、予は是を見て非常に驚いて同時に此天幕の布の間に走り込んだ、出るには出られず餘儀なく予は助けを請ふた、然るに一人の騎兵が來て予を助けようとした而して天幕の内外を檢査したるが救を求める聲は聞いた樣だけれども、風

勢の激しく到底手出しのならなかつた爲め、予は遂に翌朝まで斯の如き苦しみの間に輾轉反側して一夜を明かした、嗚呼、予をして若し一分時間を遲れて此幕を立去らしめたならば、恐らくは墜落した木の爲めに非常に怪我をしたに違ひない、夫れのみならず、若し蠟燭を點じてあつたならば、予は確たらしい燒死を遂げたかも知れない八日の夕方になつて風は凪いだ、九日の朝遂に此地を出立することになつた、予と行を同じうするものは二十余の駱駝と、二三の騎兵である、夫れのみならず、予が實に悅ばしかつたのは佛蘭西へ歸國する所の工兵大尉か一人居る、又此人に附從して居る所の料理番が居る、是は吾〳〵がフンに往くまで吾〳〵の爲に制禁の勞を執つて呉れた

第七　エルウァットよりツーグールに至る

エルウァットよりツーグールに往くには二の路がある、一はムガランの

街道で、是は他に比すれば道も広くあるけれども、旅行の點に於ては大いに易い、他は南方の道路を通るのであるが、此方は高丘が多く、水も稀つて少なく、行商隊は非常な困難をしなければならぬ、況して大軍隊には到底此地を過ぎて進行することは出來ないのである、初め我一行の前令官はツーグールに往くに就ては此路を通らうと云ふ考を持つて居つた、然るに詳細なる報告を受けて、北計畫を中止しなければならぬことになつた、既に彼等は吾々が往く所の宿泊所に溜池などを作つて北川意をしたやうであつた

吾々が、ウエッドリールに到着するのは四日間を費すのである、予がエルウァッドを出立して北際が見えなくなるや否や吾々の一行は高丘の間に進入つて仕舞つた是よりは出ることは出來ないのである、吾々の經過する路を遮る所の砂は、足を進める程深くなく、餘襲なく、駱駝夫に命じて、棒を以て一々砂を崩して

路を開かなければならない位である、駱駝の如きも之を攀づることは甚だ困難であつて殆ど四十度の傾斜をして登る位の勢ひであつた、實に此境程單調なる温氣を帶ひた所はない、黄色味を帶びた空は際限なく擴がりて大沙漠の一種の怪しき景色は双眸の中に進入つて來る、水などは一滴も見ることが出來ずして、只ドリンレタマの矮小なる植物が蒼き色を呈して居るのみで、此沙漠中に蒼々たる大河が流れて居る如く見ゆる位のものである、斯の如き所は沙漠中にては屢々遭遇するのである、殊に南方の路を通る以上は隨分經過しなければならぬのである、ア此植物は如何にして斯く繁茂して居るかと云ふと、蓋し此地を距る遠からざる所に水がわつて、其水の力に依て繁茂して居ると云ふ事でもあるし、又一定の深さに水脈があるなどゝ云ふことでもある、斯の如き光景は、此地の凹みの爲に斯は云ふやうな有様を呈するのか、或は以前此邊に四の川があつて、其爲めに今は斯の如き非になつたと云

ふ事であるか、いづれも一の疑問である、土民等の說に據れば「ウェッド」と云ふ言葉は川と云ふことであつて、是は餘程古くから口碑に殘つて居るやうである、且つ昔は此處に川が流れて居つて今では其川が乾燥して其痕も見えなくなつたやうな工合に聞える、ウッドスーフと云ふ言葉は即ちウェッド、イスーフと云ふ所から出て居るので、即ち水流の昔がすると云ふ意味である、當時サハラの方に彷徨して居る話に據ると耶蘇教民がエスクミヤーの爲に此境より退かなければならない時に際して此川に流れて居る所の水を對じ込めて仕舞つたと云ふことと言ふた、成程此說と云ふものは話ではあるけれども左もありさうな事である、サハラは至る所に水路があつて、もつと豐穣でなければならなかつたと云ふやうな所が屢々見える、此時以來より川がなくなり、遂に此地の人間は跡を絕つて、マホメット教は次第に浸入して來た、デ予は其明に依て此近邊を觀察したる處果して初めに掛いてあつた如き事

實は歷然として眼に入た、加之彼のアーグルバ及ダユエリエ、イグハルガールの發見などに依て此事實を確かめることが出來るのである、此古き川は(恐らくは古代は其のナイヂエーにして、今日は地中に其影を隱したに違いない)至る所其流れたる痕跡を遺して、今日迄往古に於て此川が如何に有力であつたかと云ふ事を現して居るのである、其長さは恐らくは三百八十哩以上位のものであらうと考へられる、夫れのみならず、地理學上は勿論歷史上に於ても、此サハラの表面上に於ては隨分澤山の水があつたと云ふ事は事實らしい、如何にして此水が無くなつたかと云ふことは一の問題である、又如何にして水が深山有つたかと云ふのも亦一の問題である、ダーリヤ氏を初めとしてウォル氏等の說に據ると、元と此沙漠には非常に水が多かつた、併し如何なる評であるか、紀馬時代よりしてサハラの氣候學上の趣きが全然遂つて仕舞つた、而して其水源の水が涸れて仕舞つたと云ふが是は恐らく表面上

に在る所の岩などが次第に流れて来て水を止めたのを原因として居る、又其石が砂に化して、其川の水を吸い込んで仕舞つたに違いないと云ふことである、既にアレッゾの高丘の如きは、決して隣りの高丘より流れて来る水の爲に斯る如き有様を呈したのでなく、天然の力に依て斯の如き變化を呈したらしい、彼の植物のクールなどは古代高丘の單一なる證據であつて、クルメーの入口に於て屢々此植物に遭遇する、又岩石的の高丘の間に形づくられたる所の孤立せる砂丘、又は一定の深さに於て屢々見る所の河床、其他アレンダの水とか、其地形などは大に疑問を明かにすることが出來るのである、殊に彼のタトレメ氏は此變遷に就て十分に錐を揮つて其意見を發表されたことがあるが、それは大に吾々の研究すべき好材料である、斯の如くしてサハラの水は殆ど日を逐ふに從つて少くなる、此地に住つて居る土民の如きは、天然の力に勝つ能はずして日一日と人間に必要なる水を得るに困難を感ずる

に極つて居る、嗚呼、彼等は困難なる境遇に在ることよ……

翌日吾々は曉に旅程に上つた、吾々の中みたる駱駝は豫定の宿泊所に至る迄は一歩も足を休めない、吾々は艦馬に乗つて其後より是に尾いて往くのである、然るに吾々の力が早くして遅に遅付いて来ると、又彼等の方が進んで来て吾々に追つく、寧ろ危險と云ふよりも、彼等を憐れむ點に就ては時々彼等の勞を慰するが爲に歩を緩めなければならぬ、出立してから第三番目の小憩所に至り、子は高丘の間の風の餘り吹かない所に於て食事をする場所を見出して極く簡單なる食事をした、吾々が宿泊すべき豫定を以て來た土地に着いた時分には太陽は未だ高くあつて、引連れたる所の駱駝は荷物を下ろされ、水を與へられ、又驢馬の如きは陣營の柱に繋がれて、漸く其日の勞を慰するやうに見えた、吾團隊の一部は天幕を張ることに努め、其他の者は火を燃す爲に近邊に繁茂せる樹の枯枝を探すに汲々として居る、食事が済む時分に

は予は湯にも沐つた、乃ち吾々は寝に就いて快よく一夜を過す、縦令天幕の外に人聲が喧しきにせよ、又風が激しくして天幕を煽るにもせよ一向氣が附かない、斯の如くして我々は日を過したが一も是れと云ふ記すべき變化もない、又記すべきやうな事件にも遭遇しない、退屈しないかわりに面白味もないのである

初の夜はウッドッシに泊つたのである、此處には植物も隨分繁茂して居つた、第二月目にはウッドッシメリニと云ふ所に宿した、此處には近來掘られた井泉があるけれども、其水は何となく青味を帶びて濁つて居つて之を飲むと不愉快を感ずる位である、第三日目の遊間にタイベーエル、グアリヤに着いた、是は我々が過ぎたる道に於て初めての人間の棲息して居る地である、此村は東北に向いて擴がつて居つて林泉地もある、村の中央には寺院が聳えて、其邊の景色には掬すべき者があるではないが、三日間に沙漠中に漂泊したる眼には其風光が何となく面白

く見える、只此地で目を惹くものは硫黄の結晶であつて住民等の家の壁の下に澤山ある、又此部落の極端に小さな埋葬地がある、其處にはレヂー、マホメット、エル、アイドの子供を埋めた所と云ふことである、

レ、マ、ーヶは吾々の出立するに先つて使をタイベー大酋長に送つて十分に盡力すべき事を命じられてある、吾々が此部落に到着して天幕を城壁の下に張ると、此處へ沢の龍乳の桶、クースクースの温き皿及び鳥其他若き羊などを携へて來るものがある、先づ第一にタイベー大酋長が其子供に扶けられて吾々の許へ來たのである、彼は既に人間の保つべき齢を過ぎて老衰して居る、吾々は其贈物を喜んで受けたが、併し憐れなる羊だけは之を受ける勇氣がなかつた、タイベー、エル、グアリヤはウァッドスーン州の町の部類ではない、併し其過する所の性質は殆と同樣な有樣を呈して居る、殊にッーグールを距る僅か一日程である故に誰でも遊びに來ることが出來る、殊に漫遊者が沙漠の風景を描

かむとすれば是非此處に來なければならぬ、又林泉地の鹽梅とか沙漠中村落に於ける建築物の奇なることを觀察するには、矢張此處に來らざる以上は其眞情を發くことは出來ないのである

第八　ウッドリールの首府

タイベー、エル、ゲッリヤを出立してより今日迄非常に數多かりし高丘は從つて其數を減じ又其高さも低くなつて來た、往古河でありしが今日は乾燥して了つたやうな所を越えて、遂に砂山の頂上に趨した、是に初めて壯大なる一の活畫が我が眼前に現はれて來た、則ち沼澤の如き所には四千萬本以上の棕櫚が、十四基迷より二百五十基迷の長き帶狀をして並列して居るのを眺める、其美しき森林の中點には圓形狀の空地がある、其處には二個の回々教の高塔が雲烟模糊の間に眺められる之を越えると、ヴットリールの西方の山嶺が紫色を帶びたる空の上に反映して居る、此峰と嶺との間は平原であつて、此處を過ぎてカスハックの門口まで侵入した、初めて吾々の眼に映ずるものは、家屋の殘址、又は古跡等である、吾々は是等の物は先年の反亂に依つて遺物をとゞめて居まいと考へて居つた、所が然らずして忽ち了解したのは、是等はツーグールに殘つて居つた工兵隊が、此町の四分の一と云ふものを壞して仕舞つた而して此處に軍隊が駐劄すべき大なる建物を造る用意であると云ふことを知つた、殊に佛蘭西政府は此處には一時のものでなく永久の兵營地を造らうと云ふ目的を持つて居る兵營地のみならず、亞則比亞人を安配する爲に林泉地の基礎を固めやうと云ふ考へである、然れども果して歐羅巴人は斯の如き猛烈なる惡氣候の處に生命を安へることが出來るかと云ふのが一の疑問に屬する、林泉地を潦渡する所の腐敗せる沼澤の水と云ふものは、毎年非常に激烈なる熱病を起すのみならず亞則比亞人でさへも此處に滯在することが出來ずして、ウァ

ッドスーンの方に向つて避暑の爲に立去る位な所である、土着の人民は僅は此海氣に抵抗して充ち得らるゝ堅固の身體を有するけれども北種類は然人種に屬するので、肌の色は殆ど同一のやうに見える、然れども多少北客視の點に於ては、未だ全く是に變化したと云ふことは出來ない、斯の如き猛烈なる氣候に抗抵することの出來るものは、然人種にあらざれば到底堪えられないのである、時はシッアッチャレンメ、又はガラッンチック人種が重に居つたる所で、此邊の勢力は彼等の手中に歸して、今日に至るまで彼等は此主權を握らなければならぬことになつて居る、又は蘭巴人を始めとしてフェニス人種は到底此處に移住して生存することが出來ない爲である、

此處に至るまでウッドリール州に於ては殆ど纖馬人の蠶食したる所の形跡を認めない、有名なる歴史家イブン、カルドーン氏の說に據れば此州の殖民と云ふものは亞刺比亞侵略の最も勇勢なる團隊を形つた

るセナチェンスの一つなる、リフの侵入が其根源であると云ふことを言ふて居る、其說は或は信を措くことが出來るか知れない、何故かといへば林泉地は總て此人種の元素を形る所の固定人種に迫つて居るから、到底他の人種には斯の如き氣候の下に永住することが出來ない、只可成地面を多く取ることのみをして、其一部は土着人民をして耕作をなさしめ、而して其收穫の稅を取るやうな方略を執つたものと見える、今日此邊のウッドリール人種は勿論、水草的住民、又は林泉地に住居する人民に於て認める所の殖民の方法である、

同々教紀元第八世紀の頃に、ツーゴールの主權者に依て、ベニムランを將帥として主權を握るまでは、間斷なく支配をして居つた、然るに千八百五十四年に佛國西の邦隊がウッドリールに入り來つた、而して數年の間はクーアイチャークと唱へる有名なる大酋長の許に名ばかりの獨立をさし

て働いた、予は此種々なる話に於て、其政界上所の如きものを動かさずに置いたかと云ふことを認めることが出來た、併し遂にウァッリール はウァットスーフ州に一致して、一の大區を作つて、遂にルーアクの大酋長のアリーベーをして之を統轄せしむることになつた、アリーベーは今より數年前に死んで其子が其跡目を襲ふて居る、然るに是は千八百七十一年に其敵なるゾー申佐より一時此地より逐放されたのである是がヘンシャラッフの最終の權統者であつて、今日ではクァイナーク の息子がトマサンの酋長の役目を行ふて居るのみであるが、其前に予はチャヤニーの大酋長の家で解近した、未だ年若く、容貌も單純で別に悠寛があるやうな容子も見えない、從つて其人物も高尚であるやうには見取けられない、

ツーグールの地は來ろ觀則立つたる圓形狀をなして居つて其圓內に二つの大きなる橫斷線が橫つて居つて、其兩端には大きな城門が飾かれてある、此圓內の長さは四百米突位である、家屋は多くは粘土を以て飾かれて居る併なから寺院とか或は富裕者の家などは白堊を以て圍められたる硅質の粘土に依て飾かれてある、城壁の高さは三米突位であつて周圍に城櫓が造られて、其廻りは堅固なる所の壁を以て掩はれて居るが此壁は敵を防ぐ爲の必要上でなく砂の襲來を防ぐ爲である、夫故に甚しく砂が襲ふて來ると、此壁に止められて外圍に自ら第二の砂の壁を拵へるやうになつて居る、此中には種々なる區があつて、或は猶太人の居る所もあるし、又奴隸より開放せられたる黑奴、其他外國人の居る所などもある、

此處に二つの大市場があつて林泉地中海での商業の焼點となつて居る、一は朝の市場であつて、城壁の外に在る、此處では先づ家政上の材料を賣つて居る、一は夕方の市場であつて、市の中央なる四角形の場所を占めて居る、此市場の物は總て小間物屋とか、靴屋とか、鍛冶屋などが見

世を張つて居る、此彷にシヤクビラの大伽藍がある、内部の装飾の美麗なることに於ては已に人口に膾炙して居る、チユニスの美術家が今世紀の初めに建つたもので、大理石の柱などは、チユニスより駱駝の背を借つて運搬したのだと云ふことである、又予が其處に於て最と感じたのは木彫の講堂である、此寺の彷に一の高き山があるが、其處へ昇ると此邊の景色は總て眼中に入つて來る、北はムガクンの林泉地を囲み、南はトーサンの林泉地まで指點することが出來る、予が旅行の同伴者等は殘跡の中に泊ることになつたけれども、予は天幕をカスバクの内庭に張つた、其處は亞剌比亞人を統御する役所のある所で此境城は村の南方を占めて居る

此地の王の宮殿は實に慘憺たる有樣になつて居るが、昔時と雖ども餘り立派なものではなかつたと云ふやうな傳が見える、壁は總て石灰を以て塗られてもう既に崩れかゝつて居る、部屋の如きは小さく且つ裝

飾品もなく、戸などは低くして只裝飾として見えるものは棕櫚の樹で造つた家を守る神の像があるのみである、庭園には淺々として蓋きざる井泉が進つて居る、又城壁の如きは此地方の爲に著しい利益あるものとされて居つて、其堅牢なることは如何なる敵の來襲に遭ふても、一朝一夕には崩されない程堅固に作られてある、現に前年の反亂に際して多くの軍隊が乘込んで來たが數日間も彼等の來襲に向つて抵抗するとが出來たさうだ併ながら衆寡敵せずして潮の如く入込んだる敵兵の爲に遂に破られたけれども、其敵を數日間防禦することが出來たのは、全たく此城壁の力であつたらう

亞剌比亞統御國に若き將官が數人居る、其長はハッシル少尉であつて匈牙利の出生の老士官である、其人の生涯と云ふものは殆ど小說的なものであると云ふことを聞いた、是等の人々の爲に非常なる待遇を受けて程々が此處に宿泊したのは名譽の如く考へられて、予に對する所

の旅情の驚いのには感謝するの外はない予が到着した晩から市街には至る所松火を點けて而して示威運動のやうな雛梅に隊をなして市街を廻りながら歡迎の意を表する松火の光が明滅として或は殘此の藤に隠れ、或は庭園の樹木の中に現はれる有樣は恰も鬼火やシラヤーヌへ往つた如く感じられた、其翌日予は林泉地の内部を探險したが斯の如き植物に富んだる所に遭遇したことはない、當に植物が繁茂して居るのみならず吹き送る風は冷やかに且つ涼しく感じられる、椶櫚の花は咲き亂れて太陽の光りに反射するなど一層の光彩を添へる、又此地位椶櫚の繁茂して居る所はない、水が十分であるから根部は水に浸されて居つて上部は太陽の光をあびて居る、椶櫚の實は一年に十二基瓦を收穫することが出來る種は細末にして駱駝または野羊などを養ふ材料にする、又其椶櫚の皮を以て非常に強き繩を拵える、其他紐を拵えたり或は籠を製したりなどすることが出來る、幹を以ては家を造つ

たり、井戸などの材料にする、殷々椶櫚の樹が生長して來るに從つて一種の汁を拵える、之を酒或はラミーなどに加へて、最も此邊では貴重なものにして居る、聯隊の庭には無花果、梨などゝ云ふものが盛んに繁茂して居るのを見る、併しながら其樣子は其だ悲いし有樣をして居る、要するにサハラと云ふ所が椶櫚の國であるが如く決して葡萄の國でもなく又花を植えるに適した國でもないと思はれる

ツーグールを流流する所の水は何處から來るかと云ふとタイベハルより引かれて居る、又井戸其他より湧いて來る、其湧く原因に就ては種々地理學者などは探險したやうである、此雨水の結果で水が湧く即ち雨がッアレッグの山から押して來る、此雨水は或る深さの所を流れるのである、夫故に地中を潛ることであるから、從つて水が漉されて清潔になる夫故に概言すると、ウッドリールと云ふ所は、地面の下に川がありと言つても宜い位である、それが枯れてある場所に來ると其水が上か

ら湧出すやうな工合になるのである、夫故に土民などは井戸を掘るに就て種々な方法をとるが、今日は未だ幼稚なものである、佛蘭西人などは其方法を以て掘るけれども、或は七十七メーメル或は七十九メートルの深さに於て水脈に遭遇するのである、さう云ふ水の所は、一分時間に四千リットル位を汲むことが出來る、グレヂルの堀井戸に較ぶれば六百リットルも其量が多い、

第九　トマサンの大寺院

予はトマサンの林泉地に於けるシダー、マホメット、ユルアイドの寺院を見ずして、此ツーグールの地を出發することを望まなかつた、夫故に予は三月十四日の朝城門を出てた、行を同じうしたのは亞剌北亞統御國の二將官のみである、トマサンはツーグールを距る僅か十二基迷の地に在つて往時は北西林泉地の間は椶櫚の山林を以て相連續して居つたと云ふことである、然るに今日は少許の野菜の生えたると小丘の數の多きと硫黄質の土塊が堆くあるのを見るのみである、此地は僅かな距離でありながら、此間に於ては屢々旅行者が倒れると云ふことである、太陽の熱の酷しい爲に日射病を受けて斃れるのもあるだらうし又猛烈なる氣候の影響も受けて仆れるのもあるだらう

トマサンの入口は庭の入口の如くにして遠くより見ると恰も突出せる小堡の如き形をして居る、街は長方形にして多少の傾斜ある丘の上に立てられてある、其處には椰子形の大きな湖水のやうなものがある、水は清く清々として湖畔に蒼々とした植物の反射する綠色は實に繪の如くである、トマサンはツーグールに對しては商業上且つ政治上の競爭者であつた、恐らくサハラ全體中此地が先年の反逆に於て利益を得たに違ひないならうと思はれる、今日ツーグールは既に半ばは崩されれ、人民をして安離滅裂に潰走せしめた、夫故に住民はツーグールを去

つて是より一層生活に適し易き地を選び、又行商隊の如きは、其市場に行く路を變更して仕舞つて、此地を通らなくなつた、何れもツーグールに往かずしてトマツヤの方へ向つて這入り込む、又ツーグールを距る僅かであるのみならず、軍の餘波も受けず、從つて他より重じられて居る地である

チツヤニーの寺院は林泉地の中央に聳えて、此地を距ること二キロメートルの所である、外面より之を眺むれば殆ど一個の城砦の如くで、高塔の下に連れる高き壁は何となく厳めしき姿をなして居る、吾々が此處へ往くと第一の城門に於て、シヂーマルメット、エル、ディドが老人を伴ふて吾々を迎へて、非常に待遇した、又大酋長シ、マヽールも吾々の訪問の事を豫め知つて居るが爲に、自ら其部屋を出て吾々を謁見室に導いた、其處で支那製の陶器の上へ盛られたる温きコーヒーを出した、予は通譯の一人を以て宮殿の内部を觀覽せむことを希望した所、彼は之を

容れて其弟の一人をして我々の案内者となさしめた、

予がダマールに行きし時、予はザヅヅの耶蘇教上に於ける多くの寺院と云ふものに比較した、我中世紀に於ては實に耶蘇教の力は強く殆ど今日回々教が其社會に勢を揮ひし如くであつた、而り此回々教は宗教的觀念の趣意に基いて、一は回々教に對する敵愾心を增さしめんが爲めの目的を以て作られて居るものである、で是を述てたる原因と云ふものは自然的の目的のものであつて、政府の報告書に據れば、各州が此寺院の爲に支拂ふ所の稅と云ふものは、政府に納むる稅よりも重いと云ふことが書いてあつた而して常に此處に於ては宗教的儀式を執行する、其他總て善行を賞すべき事は、此場所に於て行ふのである、其支援は非常に体揚して其勢力を振つて居る、此回々教國に於ては一般に宗教上の社會も亦普通社會も殆ど相結合して居つて、此地なども別に政治上獨立をするでもなし、而り寺院の支配の下に居るのであるから、其

蕃人民は厳しき専制なる法政の下に其身を置かれないと云ふことを用意せむが爲に、總て此回々教の社會に這入り、一朝事有るに際しては互に相聞結一致して、其目的を遂しやうと云ふ考を常に有つて居る、又一方には此會合は愛國者などゝ云ふと非常なる武器を貸す力を持つて居つて、能く其長の下に盲從しなければならない義務を持つて居る此社會の中には合言葉又は合印などがあつて、上下共に規則が立てられて居る、耶々會員を個ふして種々なる事を議する、チャヤニーの命令と云ふものは戰爭後、佛蘭西人に對しては最も忠實なる同行者である、と云ふ事を言ふて居る、彼の先年の反亂の時に於ても、總ての土民等は佛國を捨て反旗を揭げたのに、シダーマハメット、エル、アイドは其驚を連れて是に入らず六ケ月間は城壁の中に包圍攻擊の苦しみを受けた漸くクロア將軍の知を得た位のことである、能く斯の如き堅固なる考を持つて居るのは宗教上より來たので、若し我々をして考へせしめたならば彼等と宗教を弱にすることであるから、一時は成程佛國政府の下に服從して、其國旗の下に支配されると云ふやうなこともあらうけれども、一度干戈が起るに際しては彼等は必ず反抗する、無益な宗教を捨て、以て自ら身を殺すと云ふやうな事があるに違ひないと考へたのに、豈圖らんやさう云ふやうな事は更にない、蓋し彼等の宗教中には猶忌と云ふやうな心があつた、自然其結果として面白い成蹟を見ないのである、彼ボリエ氏がサハラを旅行した時分に、チャヤニーの大酋長は彼にクーアンの修飾を與へた、是が爲に至る所非常な優遇を受けた而して彼等の力に據て一の危險もなく安全に此サハラの地を踏むことが出來たと云ふことが書いてある、シダーマハメット、エル、アイドの兄弟共はサィィヤの中の獨立なる場所に住つて居つて外面から見ると、是程單純なる住民はない、亞則北亞の奚術は至る所如何にも優れな如く見える、併なから各〻北部屈には種々の器物が飾つてある、それで決し

て主人の番猫などを覗くことを許されない、又此酋長等は歐羅巴婦人の眉と云ふやうな種類を非常に集めて居ると云ふ評判であるが、不幸にして見ることを得なかつた、

我々の導かれて通入つた閨見室の内部は實に美麗であつて、眼を驚かすばかりである、殊にシマ、ールの部屋の如きは一層美麗である、部屋の隅々は珍らしい陶器を以て飾られ、其他歐羅巴の玻璃器を初め金銀の器物などが所狭きまで並べられてある、予は至る所來た斯くまでに蒐集して居るのは見たことがない、吾々はシ、ーマホメット、エル、アイドの父の墓を觀て、我々の見物は此處で終つた、此墓は非常に立派なものであつて、墓の周圍の壁には種々なる花などが描いてあり、又其裝飾は實に眼を驚かすばかりである、恐らく是は予が見た所の一番奇麗なものであるに違ひない、壁の内部は漆塗に陶器の四角な寄せ石を以て拵られて居る、其上に金字で色々な經文が書いてあるのみならず種々な

裝飾がしてある中央に墓塔があつて其高さは殆ど十二メートルもあつた、其下に死體が横つて居るのである、

其夜予はツ、ージールに着つた、而して三月十五日ビスクラへ向つて、エルゥァッドの同伴人と共に出立した、ゥァッドスーフより連れて來た運搬夫等は、ツ、ージールまでの約束であつた故に、此處で其數を減じて、馬が三頭に駱駝の二頭及び駱駝使ひ驅馬が三頭、其他料理番及び土民が二人、それから二人の黑奴であつた、硫黄質の粘土を以て叩かれたる脆弱たる原を通て、小アレック山を越え、シ、ーザ、ラ、ジットの林泉地の方へ進んだ、其邊では人民が植物を保護することに努めて、或は垣を拵へ、或は棧を作つたりして居る、到底斯の如き方法にしない以上は植物を保護することは出來ないのである、ツ、ージールを距る四十粁迷のタメルサ、ジダと云ふ所へ泊して翌日出發しゥァッドスーフの方へ進んだ、此間は距離も僅であるけれども、其變化の多いには驚いた、此處へ來ると

砂漠の旅行

總て氣候も變じ、丁度今迄は春の初であつたのが、忽ち夏の氣候になつて居る、林泉地に於ては、雨の雪などは既に熟して居る、大麥の收穫は始まり、蚊は空中に群をなして居る、夫のみならず一種の惡臭は鼻を襲ふて來て、熱病の發生を助けるが如き感がする、吾々の引連れたる行商隊の如きも其臭氣に苦しむやうな工合である、又草木もなき所に反射して來る所の太陽は實に吾々の身躰を燒附けるやうな驅梅である、併し此暑さはサハラに於ける激烈なものでない、是を以てしたならば實に酷暑の中は如何であるかと云ふことを想像することが出來るのである、

三日目の夜にクーガット、エル、ドゥ、ボールの嶺を越えて十八リッの所に於て、白皚々たるオーレー山が日沒の光に照されて薔薇色を輝かして居るのを望んだ子は實に此光景を見て、子が沙漠を去つて愉快なる文明の社會に再び戻ることが出來たと云ふことが思はれて、欣喜雀躍思

はず快を叫んだ、遂に三月十九日ヒスククの林泉地に入つたが此處は今迄の所と全然違つて居つて清潔である、空氣も清冥である、市街も立派にして居る、

涙である、ウァッドスーフや、又はウッドリールの地方とは大に其趣きを

極北岬（ラポニー）

第一　從ゴッテンベルグ至ラ、ゴチー

千八百六十三年の春、予は予が朋友の一人なるソルサンド、ビークマン男爵に遭遇し極北岬探險の意見を開陳したことがある、此旅行の困難危險の如何は扨て置いて、其目的たる此地が如何に他の場所と其趣を異にして居るかと云ふことを、十分に探險するだけの價値があると云ふことを考へた、是へ行くには歐羅巴から二つの道がある、一は陸上、即ち瑞典の力に出るのが一つ、他は海上を那威の海岸に沿ふて進るのが一つ、即ち此二つである、昔時は僅かに那威北岸の各港の間を往來して

北交通の便を圖つたのみである故に前に既いたる二つの道の如きも隨分之を越えるには困難を經なければならぬのである、極北岬に到着するのは一種の冒險的事業であつて、理學上とか、又商業上に大利益があるにあらざれば、到底此地まで旅行者を導くことは出來ないのである、極北岬は地球上に於ける最北なる人民の住ずる一點であつて、今日になると美麗なる蒸滊船は數多く那威の海岸に浮んで、彼の有名なる海角の麓まで容易に到着することが出來るのみならず、夏期になると漫遊者は續々として、淋しきマッロの絶壁に攀のぼる者がある、如何に艱うたる驅容的の旅行者と雖ども、此地に足跡を入るゝには、スヰスの旅行に二ヶ月間を費すのと更に異なることはない、我々が此旅行をした時にハンメルフェスト號上に獨逸の新夫婦が新婚旅行の爲めに互に手を執つて太洋の浪の上も怖れず、さも愉快らしく我々と行を同じうするのを見受けた、

不幸にして今日は昔時の如く二つの路はない、單に那威の北を往くだけの路のみになつて仕舞つた、即ち海を渡るより他に方法はないのである、極北岬よりトロンヒエムに至る旅客は步行を試むることが出來る、然らざればスカンヂナビヤと露西亞の領土とを結合する服飾を一週するかである、吾々は殆ど漫遊者の全部が路を取ることに於ては非常に不愉快を感じたと云ふことを常に耳にして居る、併ながら我々はそれを聞いて吾が心を押へることが出來ない、則ち那威を步くのみならず瑞典及ラポニーまで跋涉し、フィンランドの一部分までも探險しやうと云ふ考へであつた、北旅行は危險と雖ども、那威の海岸の普通の路を極北岬に至る日子と殆ど遊ひない位である、

我々がゾンマークを經過したのは六月の上旬であつて、ゴッペンハーグとゴッテンベルクとの間を往來する滊船の中一般に乘組んと云ふ者へであつた、予が乘組みし船は次第にゴッペンハーグを離れて瑞典

の海岸に徐に近いて來る、漸くにしてオレスンドを越えるや否や、我々はカットカットの油滴の爲に非常に激動された、コッペンハルゲの港口に碇泊した時は恰も夜半であつた、五六の松火の光りを借りて、船を下り、海岸に連てられたる大なる家屋の下まで導かれた、是は此地の稅關であつたが、幸ひにして檢査に長く時間を費さず、又左程の面倒もなくして此處を通過することが出來て、コッペンハルゲ（コッペンハーゲン）に投宿せんと此處を出た、夜半のことであるから市街の淋しきが爲に、我々を戰せたる事の機る事は四方に擠いて聞える、月は黑雲に蔽はれて顯なせる光りを、時々我々の眼にあびせかける、我々がホテルの門前に到着した頃は、ホテルの門は閉さられて人影もない樣子である、恐らく漁船の此日に到着するのを知らず、又旅行者の一人もなからん事を怪しして、ホテルの者等は快眠を貪つて居るのであらう、我々は暫く北門を叩き、高聲に呼びなどする中に、漸く家の内より靜かに答へる聲がした、是と同

時に半ば眠れる長、大な婆子が眼をこすりつゝ何事も甘はずして、我いをば最も大きなる部屋に導いた、而して此部屋に在るものは、僅かに島の毛を充てたる裝樣なる小さな浦團があるのみであつた、コッペンハルゲは北部に於ての最も麗はしき小さなる都會である、此地はヤスターヴァドルン時代に和蘭人に建られた所で、此和蘭人は瑞典より露西亞、コーカッスを越えて印度までの路を常に夢想する者等であるが、今日に至るまでコッペンハルゲには一種の和蘭的の趣きを遺して居る、此處に建られたる總ての家などは和蘭或は丁抹から持來れる材料に依て建築されてあるが、美術的紀念物などは更にない、僅にヤスターヴァドルンの時代の株式取引所が目を惹く位のもので、是とても美術的壯大なりと云ふよりは寧ろ單純に設立されしと云ふ傾きがある、市街などは規則正しく、又路幅も廣くして、運河は四方に通じ、無數の小橋は架けられて往來の便を圖られてある、町の周圍には峨々たる山脈が相を爲し、一方

には自然の城壁が海に向つて築かれてある、又一方には肌を刺す如き北風の來襲を防がんが爲に雲に聳えて是が屏風となつて居る、東南には流々として流るゝゴタニルフあり、南には半輪形に切れたる所から海岸に導く道路を圍む、此の地は瑞典王國の第二の都府にして、人口は五萬に下らず、何は年々歳々増加するのである、予が到着せる翌日は日曜日であつたが、此地の人民は非常に宗教心に富み、宗教の命令に從ふことは實堅いのである、又日曜には英國に在る時の如く、或る時の外は法律に依て何事をするのも禁じられてある、夫故に飲食店の如きも閉されて市街は寂寥として居る、萬一寺院に於て儀式を行ふ最中に飲食などを賣捌いた時には、其者は非常なる刑罰に處せらるゝことになつて居る、併し此瑞典人と云ふものは英吉利人の如く、宗教を刻苦して解釋するものでない、安息日は日を寺院で過つて、夕方になれば多少社交的の交際を始める、夏期の間は北方に於ける各地に於ては、種々なる快樂

を貪るの道に缺乏して居らぬ、實に長き冬期の中、苦しみたる勞を休めんが爲には、其行屆きたることは世界中稀れに見る所である、總て是等は家屋と云ふものもなくして、青空の下にあつて樂しむのである、此市街の西北に當つて一の廣場があるが、其處には泉石の裝飾もなく、又群蒼たる森林の繁茂する景もない、總て見世物小屋の如きもので充たされてある、僅に小さな處があつて、音樂とか、或は演劇場などが造られてあつた、

此地の極端に一大廣地がある、是は人民等の娯樂場として設られたるもので、毎日曜日、此處に殆ど大綱日を爲す、種々なる見世物や、或は小商人などが敷つて此處に店を張る、吾々が巴里などで見る所のヤルの演劇即ち人形演劇まで此處に設けられて、小さき幼少な小供等が悦んで之を眺めて居るのを見る、又男女揃つて地上に小莚を敷いて其上に座し如何にも眞面目な顔をして砂糖の棚を口にして居るのが深山ある田

舍風なるヴィオリンと胴調なる歌の聲に連れて若者輩が舞踏を始め如何にも嬉しく、如何にも樂しさうな有樣をして居る

ゴッテンベルクよりストックホルム（瑞典の都會）に往くことに決したが往くには西南線を通るのとゴチーの運河を通るの二つがある、鐵道に依れば十二時間を出ずしてストックホルムの都門に到着することが出來る、浸遊者の非常に急ぐものは鐵道に依つて南方瑞典の有名なるゴチーの運河を通つて瀑布や河流などを見つゝ三日間の航海をしない、吾々は案内者を招んで聞いて見ると、何日蒸氣船がゴッテンベルクを出帆してストックホルムへ往くことになつて居る、尖故に我々のゴッテンベルクに着くや否やゴタカヲレを出帆する第一の蒸船があるかと云ふことを問ふのが、吾々が爲すべき第一務であつた、然るに非問を趨しても確も蒸船の出帆時刻を知るものがない、何所に往つて問ふたが宜いかと躊躇くと茫然として答へるのに、ストックホルムへ往つて聞いたら分りませうと云ふ實に怪しからぬ答である、吾々はストックホルムへ着いた以上は時間を問ふの必要はないのである、念よ追來すれば彼は今二三日お待ちになつたならば瑞典に往く蒸氣船の出帆時刻が掲載さるゝでございませう、などゝ優長なる事を云ふ、是に於て吾々は驚を轉へなければならぬ然るに、ゴッテンベルクを去るに先つて彼の有名なるドルラッタンの瀑布を觀ずに、みすゝ此都會を後にすることは出來ない、所が幸に翌朝小蒸氣船がゴータカナルを出帆して彼の有名なる悪魔の下まで往くと云ふことを聞いたのみならず、此處より翌日出發しこゥチルスホルムよりストックホルム港まで鐵路に依ることが出來ると云ふことを知つた

朝の九時にゴッテンベルクを出立したが、氣候は寒く、北の寒さは何となく寒肌を刺すが如く、北風が吹いて來て碇泊して居る蒸氣船を動搖せしめた、吾々は此處を出帆するや否や、一方の禿山の傍に附いて進み

出したが爲に風も少なく、又淡色も一種の風光を爲して居る。ポータエルは運河的の川と云ふより寧ろ小運河であつて、水は花で紅るに綿りに布張られし毛氣のやうな原野の間を通り、沼澤的の間を抜け、鵝などが長閑に浮んで居るのを見る事が出來るさうだ、

時々刻々蒸氣船は旅客を下し、荷物を殺せむが爲に碇泊する、其度々に乘降する旅客は重に田舍者だとか、又は商業家のみである、其船先に一人の呼賣商が居つて、弓形に曲りし身に半白の髭を生して、何となく銳き眼光をして、猶太人の相を持つて居るのが、船の碇泊する度に荷物を開けて乘船者の眼を惑かむが爲に種々な物品を見せる、遂には其物品を出して甲板の上へ並べて、土民等に誕を流さしめるやうな物を出し始める、種々なる銀細工の鎖、其他釦などを始めとして、手巾や繪畫紙の如き物に至るまで持つて居る、然るに此處へ船長が來て、此商賣を盜止める命令を下した、彼は荷物を殺めて一箇も出さず甲板の上を下つた

が買人は綿々彼の後に尾ひて、下へ往つて仕舞つた、

此船中に吾々同樣の漫遊者が二三人居つたが、皆な那威の者ばかりであつた、其中の一人は自分の家族を連れて旅行するものであるが、熟練したる佛蘭西語を以て、何處へ往くかと云ふ事を我々に問ひ、我々がストックホルムへ向つて旅行すると云ふ事を聞いて頗りに那威國の狀況などを談して呉れたり、又瑞典の形勢などをも綿々說明して呉れた、我々はコンゲールヴの碇泊所に數分時間船を止めることになつた、此處は王城のある所で、那威の都會である、ゴタエルンの西方に向つて第二の河口を開いて居る、其中央にはヒスシングと稱する一の島が出來て居る、然るに蒸氣船は此處に長く停まる事をしない、此處を出發すると谷は深くなつて來る、ホヒスの有名なる殘趾が眼前に現はれて來た、此處は即ち那外の舊城であつて、十四世紀には木を以て建てられ、十五世紀には石を以て建てられたるものであつた、而してガムラロード

ースと稱する所が眼前に現はれた、此處には今日は只二個の畑と非戸とを以て取まかれたる二三の納屋があるのみであるが、是が即ち中世のゴッテンブルグの殘物である。

リークーエテートに於て蒸氣船が倘ほ溯る間には、絶壁の上に在る鋸割場を見物した、此邊には非常の良材がある、元來瑞典の國產物と云ふものは材木で、宏大なる森は瑞典國の金庫である、實に一種の方法を以て森林を耕すが爲に無窮の國富を作成して居る、此森林に良材の有る事は非常であつて、撰擇に洞しない位である、伐り出した材木は谿谷の間を流るゝ水利に依て輸出するのである、夫故に吾々が此川を上る間には無數の材木を載せたる大きな船に屢々遭遇することがあつた、吾々は間もなくトルバと云ふ所の前に往つた、此處には彼の美しきカトリーヌ、ステンポッリと稱する婦人が居つた所で、彼のヤースターヴァーが三度目に娶つた人であつた、カトリーヌはヤースターヴァー夫人を愛して居つ

た、然るに彼は年も若くあり親切でもないけれども彼は國王でもあり又人民からも敬せられて居る人である故に、カトリーヌは別に異議を唱ふことが出來ずして、此者と婚禮することになつた、然るに或晩の事新女王の夢物語に、予は我國王たるヤースター陛下に向つては、最も敬意を表するけれども、併しルーヌを集めることは出來ないと言つた、此言葉は實に此老帝國に對しては最も深き意味のある言葉として殘つて居る、國王は夢の内に語つたる事をカトリーヌに言ふて、而してカトリーヌを賞めるやうな事は好まない、又斯の如き事をせぬ溫厚の若子である、夫故に彼の僧侶に向つて、決して若き婦人に年とれる良人を持たしむる事は嚴禁すと云ふ布告を發した、

いよ〳〵河は狹くなつて、兩岸の絶壁の高さは愈よ增して來る殆ど晝が頭上を抜くこと二百尺以上も高くなつた、此時に於て蒸汽船は碇泊することになつた、是は即ちトルクルタの港門に到着したのであつた

ゴチーの運河はスカーヴェルヴックとレクートバクン灣と、結合し、又アルサック海は北海と結合して居る而してゴチーと稱する所は十二州もある大きな地で、眞正なる島に形られてある、此運河に就ては種々なる問題があるけれども、今茲に喋々する事を止めて、直にトルクルダに着いたる話に移らうと考へる

我々は船を下りて此運河を右に殘して絶壁を辿ち小さき植物の群々と茂つて居る岩石の丘の上を歩行した、十五分間も經つと、右の方に、百雷の落つるが如き響きが聞えた、忽ち傍らの林陰より瀑布は霧を起し雨を呼び險岨より落來るのを見た、是が即ち有名なるトルクルダの瀑である、

寧ろ瀑布と云ふ名を下すよりも急湍と名けた方が適當であるかも知れない、瀑布の如く一度に水が集つて落ちる譯ではない併なから幾條となく落來る所の景色と云ふものは、他の處に於ては見られない、決して景色は壯大と云ふのではないが何となく箱庭を作りたる如く趣きが平穏で又優美である、此川の入口は松柏が森々として逆倒は開く左方にはトリイットの村が鏡の如く靜かに流れる川に麗はしき姿を移して居り、中央には樹木の茂げれる島があつて、緑の際の周圍に白き泡沫を飛ばして居る樣は、實に北國風をうまく描いて居る、

此村の近傍には地理上非常に面白き凹地がある、之を名けてクンクスゴロッタンと云ふて、王の窟と云ふてあるが、其理由たるや國王が常に此地へ來らるゝことに、其光景を見られて窟に自分の名を彫刻せしめた爲に此名が出て來たのである、恐らくは此地は歴史以前に於ては、此邊を水が流れて居つて斯の如きものを拵えたに違ひないと云ふ說である此瀑布の上に一の新らしきホテルが建築された、吾々は此處に一夜を悦んで明さうと考へて居つた、ホテルの支配人も非常に吾々を歡迎して與れるのみならず、氣容も好くあるが爲に、自分も是非一夜を愉快に

明さうとしたけれども、問船せる瑞典人が此家の出來た事を知らない爲めに、我々の荷物をヴェテルスホルムへ直接に送る事にした、吾々は此人に電報でも掛けて、ヴェテルベルヒのホテルに部屋都合などを問ふの必要がある、種々問ふた所が、彼は笑ひながら、瑞典は至る所混雜するとはない、何時往くとて部屋はあると云ふことを以て答へた、彼は無論瑞典人であつて此地の形勢に通曉して居るから反問するの必要はない、然るに其結果として我々は圖らずも不都合なることに遭遇することになつた、其上にトリィットホテルに一夜を明すことが出來ない爲にウェテルベルヒホテルに我々を導く馬車の出て來るのを待つことになつた、瑞典の馬車馬は重に農夫の馬を用ゐるので、其必要なる時に際して時々所有者が貸與するの方法である、夫故に驛々で馬の附替をする時分に、一時間も二時間も待たなければならぬ、他に方法がないから是が此國に於ては一種便利なものとされて居る、夫故に或る場合にな

ると、一週間中の旅客の數が一日の旅客の數に匹敵するやうなことがある、それは馬が足りない時分には旅客は餘儀なく待たなければならぬことになるから、從つて一時に輻輳するやうな工合になるのである、我々は一隊をなして馬車に投し、月に乘じて此處を發することになつた、此馬車を牽く所の馬は強い馬で、坂であらうが平地であらうが、路が惡るからうが、良からうが、夜であらうが、昼であらうが、一向驚りがない、斯の如くしてヴェテルベルヒに到着したが、遙かに非常な人が混雜していろ〳〵手眞似などをして居るやうな工合に見受けられた、段々聞くと一も好眞なる部屋は無いと云ふことである、然るに夜は深更になつて、他を尋ぬるにもホテルと云ふものは一軒ほか知らない、其ホテルは人を以て充滿して居るのである、漸く談判の末に戸を開けて内へ通入ることになつたが、僅かに二つの床あるのみである、是は下僕共の屋を貸して與れたので、或は卓の上に寢るのもあるし、椅子の上に寢る

のもある、其困難は言語に盡せない、自分の如きは餘義なく小さな椅子に戴つて、足を折つて北夜を過した位である、寧ろそれよりは床の上に寐た方が宜かつたかも知れない、眼を閉ぢて眠に就くと同時に鐘が鳴つて、最早汽車の出發を報じる、風は冷やかに面を拂つて曙夜の疲れを休めるやうな心持がする、夫れのみならず、眼に映ずる所の諸山の紫色は唯々の疲勞を忘れしめて、只恍惚として見惚れて仕舞つた實にウデルベルヒよりストックホルムへ至るの中で、絶賛すべき所である、或は鏡聳く山を觀、或は沼澤の豐饒なる原野、潤廣なる川流を眺むるなど實に是が南方瑞典の有樣である、

ファルコーピングで汽車を乘り換えて、ストックホルムへ往く道を執つて我々はトレボダで遅餐を喫したが、瑞典の料理として、初めて不味なるものを目にすることが出來た、此處には一品若干と云ふ値段が極めてないから、自分の意に從つて盛の上に拂つて置く、已れの眞心に訴へて

代價を拂ふのみである、此國の風俗の一般は之を以ても知られるのである、此停車場を出ると、最後の汽車はゴテーの運河を經過して、ストックホルムに近づくに從つて天然の風光は減じて來る、只森林とか岩石とか云ふものゝみに止まる、非常に長い隧道を越えて、汽笛一聲耳朶を打つかと思ふと、瑞典の首府なるストックホルムの市街は眼界の中に進入つて來た、

第二　ストックホルム及瑞典の生活

鐵道が敷設されてよりストックホルムは初めの容姿を總て失つて仕舞つた、此地へ漫遊する旅行者は最早昔日の俤を見る事は出來ない唯だ其一部の河岸を歩るいて、多少往時を追想せしむる位である、ストックホルムの入口は海であつて、此處より望む景色と云ふものは世人が常に感賞する優美なるパノラマを呈して、北方に於ける女王と此地を呼

んだるも決して、過當でないと思はしめた、

漫遊者に紹介すべき淋色は寧ろ此パノラマよりも、セーズバックと稱する一の高丘の上に昇つて全市を瞰下す所の淋色である瑞典の北角は龍蛇の伽藍する如く見え、其他市中に點色せる風樹又は王宮等の壯麗なる建築物を加へて實に掬すに足る好風光を呈し、左右には太陽に輝く公園又は樹木繁れる高丘等が聳え遙か彼方には綠色なす森林が繁茂し此間に別莊又は小亭など點綴するなど見るのもの總てが此寒帶地方に斯くの如き地があるかと云ふ事を絶叫せしむるに足りる

ストックホルムの創始はスカンヂナビヤの口碑に傳はれども茫々夢の如くにして之を見る事は出來ない、種々なる說もあるけれども、今玆に書く必要はないと考へる、我々はヤコスターブアドロフのリードベルグホテルに宿する事になつた、此ホテルは全市中最も繁華なる、最も優美なる所に位して居つて、ホテルの窓を開くれば大王の像は屹として

眞に聳え、其他此瑞典の一般を望むことを得る、河を越えて彼方には宏大にして、且つ單純なる王宮があつて、其周圍には銅製の彫刻物が飾られてある、東の方にはマーラール即ち靜謐として際限なく靜波を湛へして輕舟を走らせる、スケッパスホルンの橋は遙かなるチユールガールグンの森に連綴し、三々伍々市街を漫歩する都人士は瑞典の國服に裝扮つた我々外國人の目を樂ませる、

瑞典人は一般に體格大にして且つ强健である、夫人は優美にして、髮の色は淡茶色をして居るが、我々の眼には一種の美人として認られるのが多い、容色の備はりたる顏色の瑩の如き白さ、宛も雪に書きたる神女宛然である、

リードホテルは歐羅巴に於て稀に見る所の清潔なるホテルである、此家は瑞典國中を擧げての一大割烹店である、即ちスカンヂナビヤを擧げて之に匹敵する料理屋はないのである我々は此ホテルを得て思は

ず好其なる晩餐を喫する事を得た、瑞典の料理法は寧ろ獨逸の料理法の一層進んだもので、先づ野菜などが最も食膳に上る所の大材料となつて居る、瑞典の風俗は先づ室の隅なる小卓の前に往つて麵包又は牛酪、鹽鮭、其他此國の名產、此國の火酒などを喫する、此小卓の膳にて食するものは彼等は食慾を起すが爲に喫すると云ふが、寧ろ食卓に着いて喰べるよりも此小卓に於て味はふ方が雅致多く又風味も一層あるやうに思はれる、我々の如きは此風俗に馴れぬ爲めに殆ど滿腹して反つて食慾を減ずるやうな氣味に感じられる、けれども此國の人は其風習に馴れて居る爲に一向無頓着の樣子である、先づ音樂で云ふとオペラの幕明に奏する如きものであるだらう、此風習は瑞典のみならず露西亞に於ても一般に行はれて居る事であつて、露西亞では之をザクースカと稱へて大祭禮の時に於ては、此幕明の食事が最も多く飾られるのを一の魅惑として居るのである、

一般の人民は日に四五度の食事を爲す、一度に多く食するよりも寧ろ少なく幾度も食する方を好むのである、此くの如き國習は上級より下級まで及ぼして、唯だ其盛期の山來るのは上級に於ては其食物を擇擇されたると其分量の多いとに過ぎない、冬の間は常に宴會又は祭典などを毎日行ふて、漫遊者の如きも此嚴寒酷烈なる中に間白く其日を過すことが出來ると云ふことである、空氣の流動は最も食慾を起さしめる到る處魚類及禽獸の肉は多くある、夏に至れば實に廉價を以て充分に食事をする事が出來る、到底此くの如き地に於ては充分美食して此酷烈なる氣候に堪えるやうな考をしなければならない隨つて彼等が食物の騎奢に流るゝは無理もない話である、一般に文明の進歩は食物の定度を越くして衣服住居などに最も注意をするやうになつて來る、佛國西の如きも中流以上に於ては千七百八十九年の大革命戰爭以來其傾を是して來たのは純計上に於て明かな話である、又英吉利に於て

も同樣な統計上の結果である、又獨逸に於ても此半世紀以來食料品が減少して來たと云ふ事である、率にして此スカンヂナビヤの住民は近世侵入し來れる所の潮流の渦中に捲き込まれない、彼は天然の樂土に住ひ、文明界の人間と異つて餘り苦樂を感せず、唯だ奬食をして愉快に其日を過すを以て彼等の主なる目的とするやうに考られる、併ながら此人民等は智識的に於て缺けて居らない、北方の住民は宗教としては眞教を信じ、其祖先はヴェルヤニックにしてアングロサクソンの最も貴重なる眞質を有して居る、彼等は百般の事に熟練し千難萬障を排するの勇氣は、此北方の猛烈の氣候と相戰つて幾世紀の間養え、ず隆盛を來して居る證據である、若も或る機會があつたならば彼等は益大前進する事に於て躊躇しないに定つて居る、然るに瑞典に缺くる所のものには何かと云ふと人口の少なきと資力の缺乏に依るけれども亦た最も主もなるものは經營的の精神が少くないからである、それ

ゆゑに道利の如きも常に英吉利人に指はれて了ふやうな結果を見る此地へ來る者は此國語に通ぜず風俗に熟れないけれども此小害を打破する事は極く容易のである、此國の人民は慈善的且つ慈篤的にして歐羅巴の文明に於て恥ぢざる者等は總てスカンヂナビヤに遁走して來るやうな有樣である、此國民は衆人に對して深切に且つ慈篤なるのが第一である、亦た外國人に對して禮儀を重んずるに於ては殆ど其比を見ない、

見よ瑞典を歩るいて瑞典人が帽子を脱かずに公衆の場所に居然として居る事があるか、又居へ遁入つて無禮にも帽子を脱かず物を買ふやうな不躾があるか、又市街に於て日に十度遭遇するとも、初めて變らざる禮儀を爲すを見ざるか例せば六七歳の小兒と雖ども學校の歸途朋友に對して帽を脱するを見ざるか、又内地へ遁入つて百姓等が其傍を過ぎる旅客を見て經合土着の民と雖ども又外國人と雖ども丁寧に

之に一般するを見ざるか、又勞働者などが遭遇した時分に、一種の骨闘を以て首藥を交して互に寒暖の挨拶などをするを見ざるか、人或は是を呼んで虱禮に失すると云ふかも知れぬが、暫り住民の基礎を形くり又住民間の親睦なる外國人に對して交通の道を講ずる所の最大柱礎となつて居る、予が瑞典に滞在中喧嘩爭論を見た事なく、又此地に於て亂酔者が他に害を與へたるを見た事などは地を拂つてないのである。

予は此地に滞在する事五日間であつたが、此國の人情を審にし紙にしたならば、數千枚の多きを以てするも盡きぬ位である、隨分市街などは行屆かないで凹凸がある、店の如きも如何に立派なる大店と雖ども時としては硝子などが破壊して居るのを見る、唯だ最も配慮すべきは彼の武器博物館なるリッダルユッセである、此處は往昔議會のあつた所で又諸所を北行しても北兵營の壯大なるは往昔此國が如何に

繁昌し如何に驍者を極めたかを追想せしめる、

ストッオホルムには無數の演劇場がある、予が此地に滞在中隨分暑氣も嚴しくあつたが此地に王室附屬のオペラが來てロメオ、ヨユリエットを見た、此劇を演じたる婦人は非常に喝采を得たが、我々は言語不通の爲充分に之を評することが出來ない樣敷の如きも隨分奇麗に飾られて帝室の御座なども備へてある、予が觀覽せるオペラはギユスターブ三世がヤンカル、ストロームに於て暗刃に斃つて斃れるといふ有名なるものであつた、

又の間は瑞典の貴族社會は總て已が朋輩に引籠る、又皇室も北居所を他に轉ずるのである、尤も天皇陛下の愛寵せらるゝ離宮はウルリクスダルであるが我々は此宮殿を見物する榮を得た、其内部の構造は一種の美術的裝飾をされてあつた、又避暑に往かざる都人士等は早朝に起きて晝間は事務に執業し夜をサユールガルデンに會して互に食事な

どを爲し、又は日中に眠に付く、是がストックホルムの性質である、巴里に於ける如く夜る寐る習慣であるが夜は六月中旬頃にあつては僅に十二時より一時までの間であつて、一時過には夜が明ける、六月十三日であつたが午後十一時半に僅ほ予が携へ來りし新聞紙を讀む事が出來た、

ヴェールガルデンは實に都人の到らざる一種の幽境である、北強大なる、實に無限である、部所に樹木を以て掩はれたる道路又は高丘などがあつてストックホルムの全市を見る事が出來る、其他珈琲店奏樂場料理店演劇場などは總て此中に備つて居る、此地には元單木はなかつたが或一部には往昔の姿を殘して居る所がある、予の如きは一夕此園中に杖を曳いたが夜の十二時になつても空は澄んで明るく、樹間を通して來る風も寒倘ほ寒き思ひがした、

予は恍惚としてストックホルムの紫色に酔ふて最早他に旅行する勇氣なども茲に盡きたが、既にベルセリュス號上には船室を用意せしめて近き中にヴェッツルを出帆しハパランダに出向することになつて居る實に此都會を見捨てるのは遺憾千萬であるけれども、餘儀なく六月十三日の日曜日を期して出立して、マラール海に浮んだ

マラールは河でもない、湖水でもない、また海でもない、との旅行中の或一部分に於ては、我々は殆ど大陸などは認めない、單に諸處に散布せる所の島を見るのみである、不規則的の小島嶼が無數に配在せられたる眼界に入る景氣の變化なき幽邃にして何となく掬すべき所がある、或時は森々たる林を眺め、或時に潺湲として際限なき流れを望む、是等の島は總て松柏を以て掩はれて居る、種々なる岸角の上に白き別莊や又

は小さな庭園、其他小亭などを置む、實に瑞典は日々に壯大なる文化に對して、一種の反對なる國であると云ふ感が起る、暫時にして蒸溪船はヴターケットの狹隘なる機道にかゝつた、即ち此マラールを航海する中の唯一の障害物である、此處には昔時建てられたる城趾などがあるけれども、今日は殆ど荒廢に屬して居るやうに見受けられた、此處を去つて暫時すると、ワンク湖の一隅ロセルベルヒの口を眺めた、近世の建物が中央に屹然をして聳ゆるあり、又往時の塔などが霞烟模糊の間に樣えて居る、是は古代のシグチと稱するアセスの首府であつた、此建物は十二世紀時分のものであつて、目標に使はる所に據れば、東方より此地に來る人民が此處に在つた門の口を奪ひ去つた、是は恐らくは今日ノブゴロードの亭に於ける金の口であつたに違ひない、今日尙ほシグチュナの人民達が昔のには、彼の金の口を彼等が水底に隱さうとして投げ捨てたのが煌々として時々濱に輝くのを見ると云ふことである

蒸溪船は汽笛を鳴して此處を過ぎ去り、スコクロステールに進行した、此處に一の亭が在るが、それは十三世紀の時代に造られて、十五世紀の時代に一度燒け、十六世紀に至つて再び建築されたるものである、千六百四十九年にウランゲル大將が城を築かれたが、今日に至るまで一奇觀を呈して居る、船はいよ〳〵進むに從つて川は愈々淺くなる如き感がある、湖水は殆ど終つて沼の如き狀色となつた、或は亭院の塔の煙突の間に聳ゆるあり、或は古城壁の高く、昔時の儀を殘して居るのもある、廣漠たる原野を隔てゝ北の方に高地がある、此處は即ちガムライクサウである、イクサウは北方に於ては一の名物として評判高くあるけれども、今は僅かに其際を殘して居るのみである、寺院は專制時代に建てられたるものであつて、巴里のノートルダームを模擬したものである、然るに幾度となく祝融の災にかゝつて殆ど昔日の姿は見る能はぬ、單に小祠を建て其紀念物として居る如き昨歲である、此小祠の內部は最

も單純にして殆ど見るに足るものはない、此處は即ち彼のクヅー一世が瑞典の國王なる王冠を求めむが爲に來つた地であるのみならず彼のクヅーが治政の創始を作れば安眠を貪らんが爲めに來た所である、予は甲板上に於てエンサル人と交際を結んだ、此人は容貌も氣高くあつたが吾々が上陸するに際して馬車を求めむ爲に、我々を貸馬車屋などに紹介して、而してオスケルビーに導く爲に、一の美しき輕き車を見出して奥れた、又用意して居る間に吾々は酒を散せんが爲に、一の茶屋の如き家に休息せんとして之を求めた、此地には千二百人以上の學生が居る故にコーヒー店なども無論澤山ある、然るに是等は戸を開いて居るものはない、甚だ奇怪の感に打たれた、十分に熱考して見ると此日は日曜日であるからである、然るに率ひにして或茶屋が吾々の憐れなる境遇にあることを見たのみならず、殊に外國人であると云ふたことを認めた爲に、窃に吾々を屋内に導き入れて奥れた、或一室に通つた時に

丁度其處には二三の學生が煙管をくわいながら新聞を眺めつゝ、此國の飲料物たるポンチのコップを手にして、頻りに飲んで居るのを見た、此車の間には一人の大きなる給仕人は周旋の勞を執つて居る暖爐の上には二三の花を花瓶に挿し、何となく割烹店の内部の有樣を呈して居る、

馬車の用意が出來た爲に此處を出立して、ユプサルに在る三個の小丘の下に達したが、是が即ちオダン、トールンレヤの墳墓である、此墳は一種の宗教家で總て歴史以前に於て大に勢力を持つて居つたやうに見受けられる、此地を去るに從て緑色は更になく、眞眼に見えるものは平々たるものゝみであつて、僅かに數株の樅木が繁茂して居るのを見るのみであつた、我々はグリプスホルム港の東海岸に附いて九時頃にオスケルビー、ゾールドッシュの郭外に達した、此處は内地に稀に見る所の好宿場で、吾々は大に飢を感じたが、此邊で得られる物は乾酪類

卵、牛酪などで夫等を得て滿足した、併し何か此外に食物を得むと欲する者等は、ビスケットとか或は鑵詰などを用意するが適當であると考へる瑞典を旅行するに際して都會または町等は新鮮なる肉類はない、ミルクの如きも乾燥して居る麵麭の如きは殆ど石の如く、之を噛み碎くことが出來ない位のものである、實に其生活の低きことは彼の瑞典の都人士の如き贅澤なものとは比較にならない、

我々は瑞典國を呼んで決して貧國と云ふことを即ち缺乏又は難澁と云ふやうな事を指すものでなく、人間に一種の不愉快を感じさせるのみならず、一層甘藥を進めて言へば道徳的の遜減と云ふことであるが、此瑞典の人民と云ふものは、一般に物を賞美することが少なくして、又遊約などは殆どない、彼等は美術的の必要と云ふことに就ては餘り注意しないが智識上の事に就ては非常に力を入れて其發達を圖るのである、実故にスカンヂナビヤの人種は

恐らくヲテン人種などゝは遙かに彼等より上に在ると云ふことを斷言することが出來るだらうと考へる、

吾々はオスヂルビーを朝の五時に出發しやうと決心をした、而してユッフルに往くには尚ほ十ミルス（瑞典の里程）の路を往かなければならぬ、ユッサルから引連れたる馬車を引留めて置かうとしたが、彼等は前進する事を承諾せずして立去つて仕舞つた、爲に餘儀なく郵便馬車に乘ることになつた、恐らくは途中まで往つたならば必ず好其なる馬車を見出すことが出來るだらうと云ふ希望を抱いて居つた、我々が乘つたる車と云ふものは眞の荷物車であつて、非常に苦しみを感じた

我々はウェッカで昼餐を喫した、此處には非常に大なる湯布がある、此處を發して夕方の六時頃、太陽の光りが西に沈んだ頃漸くシェーフルの町に到着した、此サエーフルと云ふ所は瑞典國中に於て商業上の土地としては第二位を占めて居る、

此處はバルサック海の港と非常なる關係を持つて居つて、コッケンベルクの如く將來に有望なる港である。

我々が乘らんとするベルツリコス號は、此の翌日此處に到着しないと云ふ事を聞いて、一日の間を偷んでカアリンを觀んと企てた、是は即ち鐵山であつて、此處に往くには近來成効せる小鐵道に依て便よることが出來る、で其蒸車に乘つたのは火夫と機關師と予の三人とのみである、其鐵道は英國のバーシングハムにして、プロシヤとの便利を開けられてあつた、通んでグレカルリーに往くに從つて地面はいよ〳〵起伏を增して來るやうになつた、コルサナスに於てはランショに導く光景を眺め酒らく恍惚として居る間に、蒸笛一聲フウランのスチーションに達した、此處は鋼を掘堀して種々の印をば拵える原料を出したる所である、鐵煙天地を掩ふて、水の如きは殆ど背き鼠色をなして居る、吹き起る風は銅煙を運り來る、是は、黑死病や虎烈列の、豫防上最も適して居るものだと云ふ事を聞いた、此處には種々な赤色の見るべきものもあるけれども、蒸車の發車時間に迫られて遂に此處を出發したが、半にして吾々は時恰も火災中なる森林を通らなければならぬことになつた、機鐵は全速力を以て此中を横斷したが、火は天を焦して森々たる林の樹木を燒拂ふ光景と云ふものは實に凄じく又恐ろしくある、此時節に於ては此邊は火事が隨分多い、殊に空氣の乾燥して居る時分には屢々森林中に大火を見ることがある、暗澹たる太陽の光を遮ざかる森林中に於て炎を見るのは、一方から言へば寧ろ壯大なる赤色である、我々はユーヘルに歸つてリルシカルと稱する小さな脆はしきゃルに到着した、然るに食物の意に適する物なきが爲めに、予は町の大割窯店スタッドシエセと稱する家に往つて食事を爲ることにしたが、此處で一人の若き瑞典人に遭遇した、此人は北方に在る一村に往くに就て、ベルツリエス號に同乘する人だと云ふことが分つた彼が往かんとする

町と云ふのは、コメヤ又はビヤヤと云ふ所である、其夜は此若者が自分の家へ、若々を招んで晩餐を供したが、予は實に此地へ來て、家族團欒の風俗を見て實に愉快であつた、是れは彼が告別をせんとする一種の大宴會である、夜の十時頃より朝の六時頃まで間斷なく宴會は繼續したのである、種々な事を爲し、色々な物を飲んだ、其愉快と云ふものは實に名狀することが出來ない、此席に連つたる人は此地の紳士又は紳商等であつて、予が如何にして是等の人と談話を爲ることが出來たかと云ふと、談に曰ふ、美酒は談話の代りをすると云ふことで、昔はず語らずの間に、五に心上を吐露することが出來たのであつて實に奇であつた、瑞典國では上流社會又は學者社會に於ては佛蘭西語が最も勢力を有して居るけれども、商業社會に於ては英語が最も勢力を持つて居る、三時頃此家を出て予がホテルに歸るに就ては、ホテルは最早夜中の事であるから門戸を閉ぢてあるだらうと考へたのに意圖らんやリルヲホテルは門も閉ぢず、其他部屋の戸の如きも開放されてある、實に此國位氣樂な所はないと考へた、

第四　三更の太陽

ストックホルムを出發するに先つて、予が探險を試みんとする潛州に就き種々なる報告を蒐集して置いた、我々が此事を依頼した人は、我々の意を懇諾して非常に盡力して呉れて思はず深山なる材料を得る事が出來た、中にはラポニーなどを經過するなどゝ云ふ奇異なる事はしない方が好くはないかと云ふ說を立てた人もある、夫等の人の首ふ事を聞くのに、此のスカンヂナビヤなどの北端は北より南に旅行することが出來ると云ふ話である、併ながら夏の間は斯の如き逆戻しの旅行は非常に難い、何となれば河水が溢れて居つて激流の爲に到底船で超すことが出來ないのである、併ながら我々は斯く云ふ事を考へた若し

船が北河流を通る事が出來たならば、恐らくは我々が出立したる所の起點には必ず歸つて來ることが出來るに違ひないと確信した、是に於て我々は一刻も早く出立しやうと云ふことに決した、然るに此事たるや非常に困難な事であつて或者の如きは我々を引くに就て非常なる所に往くが爲に點くべき月給を請求する者もある、又或者の如きは同行する事を承知しない、並し彼等は我々の探險上の目的を達すると云ふことが困難であると云ふて冷笑し去つて我々の目的に同意しない率ひにしてリートベルグホナルの所有者の親切なるが爲めに、一人の亞米利加に歸化した瑞典人ブルンムと云ふ通辯人を得た、此人は長く亞米利加に滯留して居つた人で、無愛想なる者であるけれども併し怜悧の方であつて又親切に且つ正直の者である、

我々は六月十七日の十二時にシェフルの海岸にてペリサユリユスが入港するのを見た而して三時間の後に此地を去ると云ふことであつた

が我々が乘船したる時分には既に通辯人も此處へ來て働いて居つた、ハバランダに至る航路は五日間を要するけれども予が海上を旅行したる中で此航海程愉快を感じた事はない、ベルシュリユス號は近世構造せられた船であるが故に船中の事は萬事整はざるはなく、又旅客に對しての注意などは實に周到である船體は廣く短かくして一丸荒海と闘ふ爲に造られたる形であると云ふ事が分る、船室は甲板の上に造られてあつて廣く且つ便利である、自分の部屋の寢床を離して食卓と爲すやうに出來て居つて、讀書の机を始として、映假の道具等、備はらざるなく予か書齋に於て終日を送ることか出來るやうになつて居る、

加之我々は此の船に乘るや否や直に最も親なる人に遭遇する事が出來た、それは佛蘭西人であつて非常に快活な人で數年來此地に所關る三更の太陽を見ようと云ふ希望を抱いて居つた者であつた、それで二人の若き亞米利加人是は兄弟であつて、北局圏内まで進んで探險を

しやうと云ふ目的である、一人は其妹であるが、此婦人の勇氣は實に我々をして驚かしめた、其他の乘員の多くは瑞典の商人風の者であつて、此者等は我々を非常に歡迎するのである、加之我々の乘りたる所の船の上には、リユイザー、ミカエリと呼ぶ一婦人が居つて是はストックホルム第一の歌妓であるそうだが、バルトクンドの各地の漫遊を試みんと企てゝ、此船に乘つて居ると云ふ事であつた、

一言すれば實に我々は驚を晴らすに足るべき十分なる元素を持つて居る、凡そ海上の靜ほど晴しにくいものはない、然るに斯の如く愉快なるに於ては殆ど驚なるなどは知らない位である、加之此航路は變化多くして、刻に晩に水面を眺むるやうな單調なものでなく、倒る所山水の變化は驚げく、殊に船は處々に碇泊することであるから、從つて眺望が變つて思はず日を過すやうになる、斯の如くして我々はノーグルハム、ユデクスツアル、スンズタル（此處に於てはミカエリ夫人が音樂上に就

て、一夕唱歌を演じたが非常に貴族社會に容れられた）ヘルノーサンド、オルメスコールドスウヨツク、ユメヤスクルツテヤ、ビトアー、リユレア等の諸地を見物した、歷遊した後に、是に就て筆を勞する必要は認めない、總て是等の町には非常に火事が多い爲に古代の物などを傳へる事は困難であるのみならず、從つて其時々新へるが爲に船の如きは次第に奥深く入ることを中止するやうになつた、遂にハバクンドへ到着したが、我々の船が海岸近く碇泊したる時は夜の五時頃であつた、北風は吹き荒んで眞色せる厚き雲を吹き拂つて居つた、此間より色青褪めたる太陽は人の顏を照して、更に光線の力などを感じない、トルメエルフ河は黑色を帶びて流れて海中に入り、其兩岸は矮小なる樹木を以て掩はれて居つた、實に其風光の憐憫として、思はず我々をして悄然たらしめた、殊に吾々の如き情に脆き人間は南方を望んで、我々が朋友吾々の家族などを追想して休まず一歩は一歩毎に其鄕關を遠ざかる心持の不

愉快なること言葉に絶する位である、

此處には他に尚ほ一の蒸氣船があつたが、此船は今朝ストックホルムより到着したる船であつて、此船の上には單に三百の太陽を賞せむが爲に來る所の漫遊者を載せて來たのであつた、而して是等の漫遊者は我々の如く他の所を見物するなどゝ云ふ事はない、我々は直に船より下りて上陸しようと思つたが、到底斯の如き地であるから好其なるホテルを發見することも出來ず、又從つて安眠する部屋などもないと思つたから、其夜船中に一夜を明すことになつた、然るに其夜はパリサリュセ號でサニサンの祭典を行はむが爲に舞踏會を催した、此サニサンの祭りと云ふのは瑞典國の國祭としてある、音樂の如きも一種奇妙なる音樂を以て形くられ、其調子の奇なる、予は今迄斯の如きものを聞いた事がない、今日の主人は船のボーイ頭であつて是がポンチをとつて乘船者の健康などを祝したのは一の滑稽であつた、

十二日に我々は上陸せんが爲に非常に早く起きた、此ハパランダ市はトルチヤ市に對して川の右に作られたる町であつて、トルチヤ市と商業上の競爭をして居る、トルチヤ市は露西亞國に屬するのみならず、此の市には種々なる建物などがあつて、外面的はハパランダに比すれば見物する所もあるやうに受見けられた、ハパランダは何となく形勢かゝ悄然として居つて長き冬の間の苦しみをした如く見える、住民の如きも漸く冬の眠より起きたる如き躰裁である、瑞典人の特性は溫和にして穩護正しき性質は一般に備つはて居る、我々はトルチヤに渡ふて此河を登ると云ふ考を起した、此河は到底此の次の村なるヤクレンヤより上へは溯ることは出來ないと云ふことを聞いた故に、餘義なく此河の右岸を上る所の道を馬車に依て往くと云ふことに決心した、此邊は一般に豐饒であつて人口も多いやうに見受けられる、吾々は一基迷の中には必ず耕作して居る所も見るし又二三の家なども見る、段々深く

なる所に從つて松柏の繁茂するを見、時としては河が溢れて道路を渡して居る所などに遭遇した、

漸くてマタレンヤに到着したのは夜の九時頃であつた、若し我々が此日三更の太陽を賞せむとしたならば直に船に乘つて此河を渡つて向ふ岸に在るアバサックサ山上に登つたならば此奇觀を賞することが出來たろう、四隣閑として聲なく、天下は悠々悠河面には小波もなく、寂寞として凄味を帶び、次たる趣は他に於ては見られないと信じられる、尋常は露西亞の側の絶壁の下を通つて、而して山の下にあつたアバサックサ、は極めて穏かなる傾斜を以て、トルチル府の川に臨ふて聳えて居る併し乍らから山上に至るに從つて險くあつて我々の如き人は非常に困難をした、漸々か山上に到着した時に太陽は未だ地平線に入るに尚は十分間ばかりの餘裕があつた、北方諸山の際暗くして天には微光を帶び、次て一種の凄味かすかなる黄味をなしつゝ佛蘭西などに於て稀れに

日本の夏三

見る所の日没の赤色を呈して居る、然るに瞬間にして、海水蒸發氣が赤味を帶びたる玉を掩ふて覆らく其陰を地上に留めて居る中に、金糸を以て飾られたる總が眞紅色の紗の布を被したる如き、一つの光りものが力なく吾々の眼に入つた、是が即ち三更の太陽である、吾々と行を同ふしたる亞米利加人の如きは、三盃酒を飛げて狂せんばかりに喜んだ、間もなく、空は元形に復して忽ち朝となる實に朝と夜との間は兩暦の間に過ぎない位のものである、曉の光りは忽ち東天に現はれ、空は總て白味を帶びたる淡色の非常に強き光りよりして、氷の如き風が起つて、霧は河を籠め日出の光りを以て山の頂は薔薇色になつた、

アパサックサは往時に於ては行者などの來る處であつた、また美術家とか其他の學者、或は好奇家などは總て此地へ杖を曳かない者はない、年歲晝夜平分の節になると、ストックホルムよりわざ〳〵此爲に船を用意して、是等の人達をハパランダへ送る、然るに是等の風習と云ふ

ものは何時となく消えて仕舞つて、三更の太陽などゝ云ふ事は人口に膾炙されないやうになつて仕舞つた、故に今日此邊に來る者は非常な好奇心に驅らるゝ者にならざれば杖を曳く人はない、又此地は中々常に航海することが出來ない、去年の如きは六月二十六日即ち今歲より二日遲れて船が初めて此地へ到着した位の事である、極北岬に至れば太陽は五月の中旬より六月の下旬までは常に地球より影を現して居つて隱れる事がない然るにアパサックサに於ては僅かに六月二十一日より二十三日迄三日間である、三日間ありとしても若し風雨が強くあるとか又は北方に雲でも多い時分には此處まで來た所の旅行が無益になつて仕舞つて落胆することが隨分多いと云ふことである、

吾々は遂に此山を下りてホテルに歸つて來た、此處まで行を同じうした者は南方に向つて歸るのに吾々は是より增々北方に進まなければならぬ、而してクポニーに足を入れて、來た人の探險せざる所の境域を

跋渉せんとするのである、

第五　ラポニーの住民

普通ラポニーと稱する所は之を五つに區劃されてある即ち

アセール、エーム、ビット、リユール、トルムツンマルク

是等の土地は不定住の人民が從に此處に遁けて來て住ひたる地であつて北緯六十五度より八十度に廣がれる細く長き形狀をして居る地に依つてポタヤー海より分離して居る住民は一般にレンツヤ人と稱して居る、併ながら其容貌又言語などより察すれば我々は那威ラポニーのターメ人に接近して居ると云ふ事が出來る、體格は普通にして壯健に容貌は規則正しく、毛髮は濃く眼光は白眼色を帶びて居る南方瑞典の人種に比すれば此處に住する事最も日淺くして斯くの如き酷烈なる氣候と戰ひ艱難辛苦に堪えたる有樣がある我々が作ひし通報

の如きは常に我々に注意して、卿等が彼の地に住かれた以上は縱令金銀の力を以てしても食料品などを得る事は出來ないと云ふ事を聞つた、彼等の言は大言に過ぎざることゝ信じて僅に鹿干ビスケット茶及麵麭肉汁少しと肉とを携帶したのみであつた併ながらハパランドに於ては何も買ふ時刻なく、最其なる小麥を以て製した小さき麵麭を買ふ事が出來たのみであつたが、ハツヤラに於ては充分の用意が出來ると云ふことを豫想して居つた總てラポニーに旅行せんとするものはストックホルム於て罐詰茶、ラム酒其他食料ビスケットなどを携帶する必要がある）

パツヤラはマタレンヤを距る北方十ミルスの所なる一郡の首府である、往時此地に住くにはトルスエルフの天然の街道に依らなければならなかつたが、今日は郵便を送るべき街道が出來て次第に此邊は人跡も繁く繁昌する傾きがある、

我々が此道路を經過する時に際して炎々たる焔は無窮に天を掩ふて居る、到る處火ならざるなく一種異樣な香がする、之を此地の人民に質すに、此火は人民自身が放火したものであつて新たに牧場を開く目的であると云ふ事であつた、成程此くの如くして樹木を燒拂ふのは經濟上最も單純なる方法である、此燒跡の地面を見るに黑色を帶び、諸所に樹の根や枝等が煙を出しつゝ横はつて居る、落葉松の如きも總に幹を殘すのみで枝葉は總て枯れて居る、宛も風と焔の猛烈なるものが此の森林を横斷つた如く見える、或は若白き幹を殘して宛かも幽靈の如く眞色せる巖陰に立つて居るのがあるなど殆ど幕地の中央を經過する如き感を起さしめる、

是等の黑色は眞に瑞典の鐵製を現出して居る此黑色をして歐羅巴の黑色に比したならば一種云ふべからざる趣きがある、併ながら到る處單調にして、旅客は是が爲に種々なる變化を見て樂んだ眼より之を見

れば殆ど其黑色の同一なるに飽きさしむるのみである、到る處松柏の森のみにして時として大きな湖水が此樹間より見ゆる事もある、又清き溪流が糸の如く流れ種々の草花が媚を呈して居る、美しき平原等を眺むる事もある、二三の痩せたる牝牛は是等の人民に乳を供さんが爲め此の間に放飼となり、大麥裸麥の畑は是等の忍耐ある人民の力に依つて繁茂して居る、此平原の中には諸所に小屋等が建られ其間に一の大きなる建物が見える、是が即ち宿場である、此處に到着すると馬立場があつて馬を換へる、小兒等は手に鞭を持つて此馬の周旋をして居る、馬の川意が出來ると直ちに此處を出發した、遠ざかるに隨つて是等の現象は闇の中に隱れて了つて再び森となる、朝風なき時には一つの蟬一つの唄又一蟲の鳴聲をさへ聞くことはない、段々日中に進むに隨つて蚊蚋が纔に我々の車の前後を飛びこふ位である、氣候が暑くなるに隨つて此邊は非常に蚊が多い、我々が此處を通るに際し車の背を

聞いて我々の周圍に集つて來る、而して我々の肉を刺さんとする、之に刺された時は痛くなく、只何となく不愉快を感ずるばかりであるが數日の後に至つて、非常に痛を增して殆ど堪えられぬ位になる、

其不愉快なる事はクルニーを旅行した者の最も感ずる中の第一である、スカンヂナビヤの北方に於ては教育の點に於ても缺ける所はない、到る處小學校の設けあらざるはない、併ながら教育の本源は家庭にあつて冬の長き間其小兒を教育する事に努める、彼等は此長き夜を教育の爲に過すのである此住民等の家屋は裝飾が單純で僅に二三の額と、窓際に飾れる悴れなる花鉢位のもので、殆ど他に見るべきものはない、斯くの如きものは是等の住民の中では驕つて居る者と云ふても宜い、

遂にバヤヲに到着した、我々は第一の目的地に來た爲に非常に悅ばしく思ふた、一の大河は西の方に臨み山より流れて此地を經過して居る、河の右岸には二十戸はかりの小さなる住民の家がある、此地に來て

種々なる用意をせんとしたるに、我目的は外れて殆ど何も得る事が出來ない、漸くにして一匹の羊を得たのみであつて、之を殺して其肉を携帶する事にした、是等の爲に予は發程を一日後らせなければならぬやうになつた、併し其一日を徒費するを惜まぬ爲め我々は船に乘つて河を下つてクンヤスブルックの鍛煉所まで往つた此鍛煉所は瑞典の最も西北部に位するものであつて殆ど二世紀以前より建られてある、工業は斯くの如き地に於ては殆ど皆無と云ふて宜い、交通の不便の爲め材料を得るに乏しいのである、

此地の產物は何かと云へは僅に牛酪獸皮、及松柏を以て作られたる桶などであつて其他には殆ど輸出すべきものはない、鐵は西部に於て產出するが其主なるものはトルメクースク及ヤルリバクである、

バヤヲ州は最も豐饒にして最も人民多き州である、此處には二つの立派なる漁業場がある、一は鍛煉所に屬し、一は郡に屬する、其郡に屬す

るものは一般の人民の漁業場であつて、其漁業額は四百リーブル以上に及ぶ、是等の利益は平等に住民等が分配するのである、今一層力を盡したならば非常なる利益を得る事が出來ると斷言し得るものがある、北れは北邊の急流に於て捕する鮭であつて實に無盡藏である、

パッヤラに二階造の家がある、是が即ち此地の學校である、ケンヤスプルックに於ては一人の醫者が居ると云ふ事である、即ちハパランドより氷河に至るの間、是より外に醫者はないのである、パッヤラに於て道は盡きて了ふ、是より那威に至るにはミコオニッエルフを溯つてカレシュアンドと稱する瑞典の最後の州に往かなければならない、ウポニーに於ては航海に適する各河は街道の如く一の郵便船の航路となつて居る、それ故に諸所に宿場がある、其處には其宿場の長があつて、此邊を旅行する者に總ての便利を與へなければならぬやうになつて居る、船の賃金は十二オーレーであつて、漕手は一里七十オーレーを請求す

る、即ち是は一ミルスに就ての賃金である、此邊の人民は歳月の貴重なる事を知らない爲に時としては非常に無益なる時間を費し又非常に遲延するやうな事が度々ある、それゆゑに最も簡便なる方法を取らんとすれば順々に一の船と一の漕手とを旅行中賃ひ切るに若くはない、率ひに我々はパッヤラに於てミコオニッエルフと稱するカレシュアンドの半島まで導く所の三人の漕手と船とを借り切る事が出來た、其漕手の長と云ふ者はセンヤルク人であつて、容貌悽惨にして、毛髮は黑く、我々の爲には非常に盡力をする事になつた、

二十八日、早朝にパッヤラを出發した、船が河を離れたのは其夜であつて、ミコオニッの入口なるトルネエルフよりクロスヴクに溯つた、

第六　ミコオニチエルフ

ミコオニッに於ける諸河は非常に不規則なる形狀をして居つて、或時

は廣く、或時は細く、或時は穏かに又時としては殆ど洪水のやうな時もあるが、又時としては非常に狹く且つ激しく岩石に當つて流るゝ勢ひは實に物凄き有樣である、ミユオニヲニスカよりクンギスに至るまでの河流は狹隘にして其流も隨つて非常に甚い、ミユオニヲより乘船したが此邊は北形狀奇にして河は餘り深くなく、岩石多くして且つ激流である、船の大さも至つて小さくして二人の旅客と三人の漕手を乘せるより外、他に如何なる物を乘せる事も出來ない併ながら幸ひにして我々の乘つた船は多少大きくわつて、荷物の大概は載せる事が出來た船には三人の漕手が居つて岩石なき間を巧妙に漕ひで往く、三人目の者は船の端にあつて大きなる櫂を以て排を取りて居る予が通辯は予と相趺して居るが、此天然の風光を賞しながら半は睡つて居る、我々は船樣を枕にし吾が荷物を枕として讀書に耽りつゝ同じく河岸の風光を掬しながら恍惚として仙境に在る心地がした、

春の初めの清らかなる日であるが爲に、此旅行は一層の愉快を與へる斯く愉快に旅行するが爲め、旅行の不便、食物の缺乏、荷物の運搬には殆ど心を煩はさないでも宜い、餓えたる時分には食べ、睡らんとする時には睡る事が出來る、船が進むに隨つて景色は漸々新しくなつて來る、時々懸崖より落つる瀑布は我等の睡りを驚かして、思はず身を起して喫賞せしめる、

彌々北へ進むに隨つて、彼の有名なる蚊は其數を增して倍々勢ひを逞ふし到る處蚊軍ならざるなく、一種の襲きをなしつゝ群をなして身邊に襲ふて來る隨つて拂へば隨がつて其數を增すやうな有樣で、到底人力を以ては驅除することが出來ぬ、幸にして予が出立したる朝は非常なる强雨の爲め旅行の困難を感じた、併しミユオニヲを航海する間は好天氣であつて、暑を燒く如き太陽の光もなく、非常に面白く其日を送つた數日間と云ふものは殆ど仙境にある如き思ひをして過ぎて了つ

たが進むに隨つて夜はなくなつて來た、我々が暗黑巴に居た時の習慣は自然に失せて來て殆ど時を知る事も出來ず、今日が何日であるか區別する事も出來ない、ミュオニッを出立してより幾日經過して居るか殆ど記憶にない位である、是夜の區別はないと云ふが夜の時刻に至れば自然世間の風物が眠りに就く如き感がある、太陽はあると雖ども夜であるべき時の七八時間の中は天地は殆ど靜かに萬物は各々眠りに就く、鴨の如きは其巢に歸り、青鷺の如きも岩上に靜止して首を羽の間に狹みて動かない、鶴の如きは夜の寒を揚げて眠に就き、鴨や雁の類も之と同樣に其鳴聲を止めて靜かに眠る樣子に見える、又水中に於ては一の魚類も躍らざるゆゑに、波紋を水上に起さない、草木も寢に就きて風だに動かず蚊軍の聲きもなくして實に寂寥たる狀色になつて了ふ北北方に於ける夜と云ふものは太陽の光の下に萬物が休息すると云ふ奇異なる現象を呈する、

我々はミュオニッカに往くには尙ほ十三ミルの道を辿らなければならない此街道に於ける七ッの宿場には二三の農耕者が居つて其主人は常に漁業及多少の農業を以て露命を繼いで居る、極北に於て收穫する所のものは先づ大麥である併ながら此收穫と雖ども酷烈なる氣候の爲には每年損耗を來すことがあるゆゑに收穫のみが先づ確定したる歲入額と云ふても宜い位である、麵麭の如きは此邊には殆ど皆無である、少しの物はあるけれども到底我々の口に上ぼすことは出來ない、併ながら乳、牛酪其他土民の食料として賞味する干酪の如きは最も多く製作せられて、是が缺乏を感ずる事はない、卵と馬鈴薯は多くあつて、旅行者には是が廉價にして得らるゝ第一の食料品である、宿場と宿場との間は同一ならずして、甚だ不規則である、我々の如きは數ミルの間殆ど人跡を見ず、一軒の家屋を見ずして終つたことがある、岸は矮小なる植物に依つて掩はれ、其所には落葉松、柏の類が混つて居る、

瑞典の岸は多少豐饒にして、又沙漠らしくはない、併ながら露西亞の岸は之に反して實に見る際もない位に荒漠として居る、此兩岸は殆ど平坦にして見るべきものはないが、數ミルの水に於ては露西亞の岸に如何するものあるを見るやうになる、往昔水流のありし所の跡などは殘つて、居て彼のミュオニッの水が、以前は此邊まで流れて居つたやうな痕跡を遺して居る、

二十七日我々は右岸なるコクールに到着した、それよりミューャに至りしが、此處には好味なる小魚が多くあつて、我々の携帶せし食料を是が爲め節減することが出來た、

二十八日露西亞の宿場なるアカスヤユンヤユンを越え、其翌夜瑞典の宿場なるキランヤーを越えた、此邊の兩岸には木が繁茂して居つて、首を屈しなければ通行する事が出來ない位であつた、

二十九日の晩に一方には斷巖絶壁を望み一方には平々坦々たる平地

を見る、河は激流にして水沫を飛ばすは一大奇觀である、雪解の爲に其勢ひを增したと云ふ事であつたが、それが爲に我々は多少遲延するやうになつて三十日の明方にミュオニッナチュスターに到着した、此處にはミュオニッコスキの急瀧があつて到底船を進める事が出來ない、我が船の舵手はッユンッユンに於て僅に三時間休憩したのみで、二十四時間殆ど一睡もしない、併ながら彼等は疲勞の色を見せずして、直に出發するに付いて異論がない、我々の荷物を背に負ふて、是より陸地を取つてミュオニッニスカに導くことになつた、

我々の經過せる所は非常なる游泥の地であつて、漸く數基米突の上に其地に伏する平原を見る事が出來た、此平原はニスカ及びミュオニッの勝區を總て點綴して居る、而して我々の眼前には淺々たる河流を見る、此右岸にはミュオニッに於て見るべからざる急瀧が激して居る聲を聞く、此中央の絶頂なる地に一軒の二階造の家が建られてある、是は

瑞典の富商の別荘であつて、予が此處に到着した時に彼等は非常に我々を歓待した、此人の話によれば、今より數年前一人の英吉利人がフォニーに於て、獵を試みんとして此地に四歳の冬を越えたと云ふことである、我々の如きも恍惚として此處を去る事が出來ない位であつた、然れども勇氣を鼓して此の有名なる小部落を探險しやうと決心して、此處を出發したのは正午頃であつた、我々の通る所は森林の枝が互ひに交叉して之を伐らねば進む事が出來ない、殊に蚊軍の襲撃は激烈にして、時々休息しなければ到底進む事が出來ない、此の旅行の困難なる實に名狀し難い程である、濕布なども今までのものに劣つて居るには落膽したのみならず我々を斯くの如き困難なる所に導きたる不親切に對しては實に心中不平に堪えられなかつた、バッヤラより導きたる我々の潜手は此急瀬を越えて我々の宿泊する所の岸に船を漕ぎ付けた、故に此處を出發して直ちにカレシュアンドに向つて出立する事に

なつた即ち此處はミニオニッに於ける旅行の最終點である、此處より は一艘を增して二艘にしなければならぬ、一艘に三人の人を乘せ、一方には荷物と通辯とを乘せたのである、

ニスカを出てヽンンかに進んだ、七月一日に於て、予が宿した宿場は唯だ之のみである、即ちウニスヴルボトニーの地を去つてトルヌヴルクに往くのであつた風光は此處に於て全く異り植物の如きも次第に繁茂せず、草の如きも矮小にして見る影もない、此處に於て我々も初めて殘雪を踏んだのである、夜の八時頃になつて、我々は獨西亞の河の方にバッヤラッヨニンサの寺院の塔を見たが不幸にして是等の建築は殆んど見るに足るものはない、此邊には僅に漁夫の家が二三軒あるのみにして食物に至つては更に求むる道がない、我々は宿場の搾乳場に於て一夜を明した、我々の潜手は其下に座を占めて此家の家内の者と共に殺た、バッヤラッヨニンサはバッヨロヤーと稱ふる河畔に位し、ヒンヤ

ルクの境より北源を發する河である、若も此パサロヤー河を溯る事が出來るならば四十ミルスを節し得らるゝのであるが、此河は塞さの時に樹に依つて渡る事が出來るのみで、到底今日は其目的を實行する事が出來ない、此冬と云ふものはラポニー全土を舉げて先づ旅行に適し又道を開くに適する時節である、諸君が瑞典の地理書を繙いてラポニーを見たならば、幾十の河が包含してキオレン山よりホトヤー灣に流るゝを見らるゝだらう、此河は到處に横つて居るが、併し此間には森又は沼澤などがあつて殆ど交通する事が出來ない、漸く水溜を堀つてそれを航路として互に交通が出來る位の事であつて、それさへも甚だ少ないが爲め河より河に至ると云ふ事は困難である、嘗へて見たならばオフツエル、トルヤヤはトルスエルフ河上にある村にして、其間僅に九リユーばかりの間である、けれども夏期は此處を通る事が出來ない爲にトルスを通つてハドランドに至り、ハドラシドよりホツドカルクスの岸に浮ふてカルックスエルフを溯り、オフレルカルクスに至る、即ち十リユーの道が六倍以上になる、カッキスツッを出立して、三時間にミルスを溯つたが、是はヒンクンドに於ける馬の速力で、是よりは二時間に僅か一ミルより進まない、ニスカとパッヤラヴロエンサの間即ち七ミルスを旅行するに殆ど一日を費した、然るに最後に此カレンシャンドに到るに四時間を費す事になつた蓋此故たるやミユオニッを上るに隨つて激流になつて來る爲に斯くの如き結果を來たすのである、ニスカより我々は河より寧ろ溪流を溯るのである、否溪流にあらずして殆ど八リユーに延長せる小瀑布を溯るのである、時としては此水の岐阪より降る如く見える、潮手の如きは非常な力を以て、之を上らんとするけれども、或時の如きは二十米突も後に流される、或時は眞の絶壁を上る事もある、船に當つて飛ぶ水沫は珠を爲して、我々が衣を濕はす、其激しき響きは殆ど我々の聲をして嗄して了ふ、

殊に我々の漕手と云ふものは全力を擧げて漕ぐも之に屈しない實にカレシュアンドに至るまでは河と人間との決鬪であつて非常に惱まされたが、カレシュアンドに近くに隨つて、水も平になり二三の漁船の浮ぶのを見た、是等の船は我々の進むのを見て我々の船の傍に來り互に手を振つて禮をした、それゆゑに是等に向つて、道路を以て種々なる問を起した、其處に在りたる一人の者は、非常に我々を歡迎して、其家に我々を宿泊せしむる事にしやうと云ふ懇切な挨拶をして我々に先つて其家に用意をせんとして何へか立去つた樣子であつた、

ミュオニヲは河を距る凡そ十リュー以上である、此河幅は二百米突以上である、カレシュアンドは此河の島の如き所に建てた所である、此船より見る所の有樣に依れば此處には僅かに十軒ばかりの家はかない、此家の中に二ッの家屋が見えるが、此家は先づ他に比すれば、極めて奇麗にして且つ立派であるが、是が即ち牧主及此邊の酋長の住居である、北の方に當つては廣き峯院があつて鐘樓が建てられてある、西に當つては雪を帶びたる山の影が黑く横はつて居る、此處には大麥が非常に繁茂して居るが此邊の住民等の金穴と云ふものは牧畜にある、それ故に大牧場は到る處に見へる、我々は此酋長の家に導かれて往つた則に是と云ふ待遇もないが非懇遇は謝する所である、

酋長はクンスインと稱へる政府の役人で收稅吏、及刑事逐信官を兼ねて居る其給金の如きは極く少ないけれども、非常轉する所は獨逸一聯邦よりも大きな所を支配して居る（ミッリクッ州の如きはウールテンベルヒよりは一層强大である）

如何に佛國西に於ては郡を去る三時間の所に送られても不平を云ふ官吏があるが、此カレシュアンドの如きは極く接近して居る村に至るにも百リューの道を越えなければならぬ、殊に夏の如きは蚊蚋多く冬は零點以下四十度の寒さに及ぶ所の如き有樣を見て予は憫然に思ふ

た、彼等は殆ど流竄の刑に遇ふたと云ふても宜い位である、幸にして是等の官吏は皆家族を連れて來る爲に、多少其間を慰める事が出來る、我々が招かれたる即ち酋長的の官吏は家の内部も奇麗に飾つて、壁などを赤く塗り種々なる裝飾品を置かれてある、どう見ても一の官吏の家たる、有樣をなして居る、又眼の前には憐れなる花が盛られでありて、旅客の此處に到着したるを祝す如き雅趣である、

第七　フジエルドの一市

アルテンの源に到着するには、露西亞とスカンチナビヤ王國との間なる一の凹地を越えなければならぬ、而して我々は步行して、此沙漠或は沼澤的の地を殆ど十ミルス餘り越えなければならない、而して此地方に於ては馬などを求むるには困難であつて、到底是等の間に於ては鹽みを絶たなければならぬ、カレシュアンドには我々が乘車に適する四

ツの馬車があつたが、其持主は我々如き旅行者が此地に來るなどゝ云ふ事を殆ど眼中に置かぬが爲め森林に馬を放して仕舞つたゆゑに之を屆ふことも出來ない、此森林と云ふのは、トルスニルフまで廣がつて今より十五日前に其一端を見た位の廣きものである、我々の旅行の計畫が成立つや、此人民の半以上は、是が爲に勉め探險をして、其道の難易を報告する爲に出發した然るに三日を經過するも其結果を知る事が出來ない爲に、或はミュオニヂの河に浮び、或は此洲の牧主を防ひ、又は酋長の如き官吏を訪ねて、ラポニー人の風俗習慣等を談じて漸く慰を慰めて居つたが、最早酋長との話も盡き、又牧主の若き夫人が等々に是する好眞の珈琲の如きも其香に飽きて來た爲め、遂に八月四日の晩に至つてアルテンの道を通るのを中止して直ちに他の道に依つて進まむと云ふ計畫をなした即ち十ミルス强ばかりミュオニヂを上りてクオキムミオドカに至りコルヴヨール湖の入口(尖からキルビス山の麓

よりリンゲンファヨルドの極端に下り、而してトロムソに至れば必ず二三の馭丁を得る見込がゆゑに、それに依つて北進する決心をした、幸に八月四日の早朝になつて、後庭に馬の嘶く聲を聞いて眼を覺ませば四頭の馬は既に用意されてあつた、

此地の者等は、我々に佛貨二百フランばかりの賃金を以てコートケーまで馬車を貸して呉れる事を承諾した、併ながら蚊軍を追ひ拂ふ爲に一人の馬丁を雇はなければならない、其馬丁がなければ我々の馬をして盲目にさして了ふに違ひない、先づ此地よりミュオニヲ川を渡らなければならないが、此處には橋梁が更になく、それゆゑ、我々は通辯及荷物などゝ共に小船に乘り馬を泳がして此處を渡つた、露西亞の岸に上つて、出立の用意をしたが、一頭の馬は荷物を運搬せしめ他の三頭は我々が之を乘用する事にした、此地には鞍鐙などはない爲に繩を以て手綱に代へ馬の脊には二三の毛氈を敷き、之に打ち跨つた、而して此地の

者等に挨拶をして此處を立去つた時分には、彼等は尚ほ瑞典國の岸に於て我々を遠に見送つて居るのを見受けた、進むに隨つて我々はミュオニヲの溯谷の間に這入つた、徐々進むに隨つて、風景は更になく小湖の如きは細き發蔦に纏はれて、漸く其形を見る位である、此日は天候穏ならずして山嶺は雲に閉まれ、心細き事言ふべからざる程である、

此地方は總て沼澤にして道路内は長き棒を以て地を突きつゝ進んだ馬の如きは殆ど歩行するに苦しむ位であつて、泥濘は腹部まで達する午後の二時頃になつて漸く三ミルヌを歩るいてシュバッヤルヒの湖水の所に達した、此の湖畔に一の部落があるが汚穢にして憐れなるものである、此處では漸く三杯の乳を求ることが出來た、此處を出發して以來沼澤の中を往くが爲に殆ど休憩する事が出來ない、夜の三更に至つて天幕を張るに適したる回地を得た、其處には小さき溪流が流れて居つて、其傍には多少見えるべき樹木などが繁茂して居つた、其地層を

接ずるに此邊の木が伐られたり、又は斧を入れた有樣を以て見るに他の旅客等が此處に來て我々の如く一日を過した形迹がある、我々の伴ひ來れる者共は二三の木を伐つて火を焚きなどしたが疲勞の甚しい爲に間もなく眠に就いた、

露西亞國のウボニー人は瑞典のラポニー人に比すれば到底斯くの如き形勢に居らぬと云ふ驚歎をして歐羅巴人の感情を惹く事が山來ないのである、然れども露西亞國は非常な勇氣を以て此地を開拓する事に努めて居る、彼のヤルビス山の如き露西亞人は之を耕作して今日は一の田地となして居る、四時頃になつて我々は非常に冷氣を感じて眠より覺めた、夜前焚いた火などは既に消へて、夜露は草を濕し、霧を揺つて吹く風は殆ど膚を透すが如くに感じた、我々の驚いたのは此天幕中に二人の人が殖えたのである、二人ともランプの衣服を着て皮の箱を枕にして我々の睡る中央に森然として睡眠を貪つて居る、是等

は即ちランプルクの郵便配夫であつて月に一回ノールランドとランドの間を交通する人であつた、

我々の連れて來た使丁等は我々と共に起きて朝食を用意し、是が濟んで直ちに馬に乘つて此處を出立した、此日は非常に多き鳥の群を認めたが、此中には鴨を初として其他の禽鳥は數多く居つた、唯だ我々が獵銃を持來らざるを憾むのである、率にして我々は足下に眞を造れる鴨を捕へる事が出來た、それは我々の足音を聞いて其眞より立去らんとする時分に使丁は其母鳥の頭を認めた爲に走つて往つて之を捕へた、我々は暫くの間新しき肉に飽えて居つたが故に直に之を食つて食膳に上して思はず賞翫する事が出來た、二時頃に至つてアルテン河の河畔に達したが此處にはランプルクの漁夫等が小さな家を建て居る、此邊は船を浮ばす事が出來る、此處にて馬を下り船を雇ふてコートケーに往くが得策であると云ふ事を勸告した、我々は其提出案を採用して

彼等の意見に從ふ事になつた、我々の聞く所に據れば此地は一種の麥酒を製して數千の人を使用して居ると云ふ事を聞いた爲に一刻も早く此地に到着するの念は燃ゆるが如く、此河を發して凡そ數時間の後に右手に小部落が現はれた、是等の内部は我々が今まで遭遇せるものとは異り清潔にして且つ便利よく建られてある、此家屋は牧主又は郡吏及び此地に於て商業を營む那威の商人の家屋であつた、此コートクーにには四千より五千に上るクロニー人が住して居るが住して居ると云ふのは適當の言葉でなくして寧ろ彼は天幕を張つて居ると云つて宜い、冬の間此地に居るのみにして夏になるに隨つて西方に退去する、アハサン河に於て漁業を事とし及二三の牝牛を養ふて其日を送る、例れなる小屋に住つて居るクーヌ人の小部落を見た、それと僅かなるクロニー人が此市街を形つて居るのであつた、

クーヌ人はクロニー人と同じやうな着物を着ける所のヒンマルク人

であつて其着物は青緑色、赤又は黄濃茶色の布片を以て飾られたる一の袋の如き着物である、帽は皮にして之に煙管と刀とを携へ、馴鹿の皮を以て製したる帽子を被つて居る、其他腕環、指環などを付けて居る者もあるが是等は總て銀を以て拵へられてある、東部より來る人民は近年に至つて益々北人口を增すが那威人の云ふ所に依れば此地の殖民に就ては政府も大に奬勵をして居ると云ふ事である、我々が見る所に據ればヒンマルク人はスカンヂナビヤ人の勢力を近々に殺ぐと云ふても宜い、彼等は那威の言語を學ぶ事を忌むがゆえに餘儀なく我々が彼等の言葉を修練しなければならぬ、それゆへに是より五十年を出でずして必ずヒンマルク人を以て充たされるに違ひないと云ふ事で而も憤然として此事を物語つた、

第八　ラポニーの漂遊人種

カレシュアンドにて我々が尋ねたるラポンの天幕中には二人の家族が居つた、是は國らず心を同じうした爲に此處で邂逅したものである、アヂエルドの森林中を逆遡した後に吾々は小溪谷間に青き煙の立つのを望んだ、近づいて見ると其處は一の村であつて、北近邊には獸皮などを乾してあつた、子供等は我々の來るのを見て、奇樣なる面色をなし、驚きもせず我々の顏を見て居る、此住民は一般に馴鹿を飼養して居るが故に家屋の後方には無數の馴鹿が放たれてある、此部落に入ると、馴鹿は我々の姿を見て驚きつゝ奇妙なる聲を發する、又、ラポンの十五人ばかりの老若男女は互に相扶け合つて此馴鹿を馴らすと云ふことに苦心して居る、馴鹿は初めの内は非常に抵抗して、中々彼等の思ふやうに動かない、そこで此馴鹿を古い樹の株に結ひ附けて仕舞ふ斯の如く

ラポンアヂエルド

一週間に二三度つゝもすると能く馴れて來て、遂に此地の最も貴重物なる獸になる、其形は耳は鋭へ口は尖り眼光は爛々として、小さなる犬に似かれて谷間などに出掛ける、

此部落の長とも言つべき者から小屋の中を見物させやうとの招待であるが故に、我々は人間を入れべき獸とも云ふやうな所に進入つた、密もなく天井を切つて其れより明を取る、我々は彼等の前に敷かれたる、あはれなる、毛皮の上に坐を占めた、中央には四個の石で疊んだる火鉢の如き物が置かれてある、此時に彼の尖人らしき者が小さなる鉢を持つて來たが、其中には白き流動体の物が有つた、後に是は馴鹿の乳であると云ふことが分つた、

馴鹿の乳は一種の奇妙なる味があつて香がある、加之濃厚にして味つた後に始めて其甘味を感ずる、我々は勇を鼓して飲まむとしたけれども唇を鉢に當てると同時に、一種の嫌樣なる臭が鼻を衝いて來て嘔

吐を催すやうな氣を感じて手を拂いて仕舞つた、此小屋の内部の形勢を見るのに、寧ろ單純であつて見るべきものがない、併ながら斯の如き小さなる狹き所に居つては空氣の流通も宜しくない、故に可成談話を切り詰めて外へ出た、彼等に小量の煙草と金を遺つて、此地で拵えたる角細工の匙と交換した、

ラポン人種と歐羅巴人とは体格上著しき差異があつて顏色は黄色を帶びて蒙古人種に接近して居る眼は小さく一種の異光を放つて、顏樣は餘り多くなく、又体格の工合などから觀察すると、どうしても歴史前の時代の人間に餘程似て居るやうに思はれる、則ち歴史以前と云ふと氷時代の最末に發み、丁抹又は北方獨逸、佛蘭西邊に住つて居つた人間に當て居るやうな工合がある、

又智識の點に於ても、彼等の智識の缺乏して居ると云ふ事は一見すれば分る、全体ラポン人種は極く單純で疑懼心があるが義を正しくする

併し彼等の大なる缺點は多量の火酒を飲むのであつて、是が爲に次第に人口を減じて仕舞ふ失故に此前途と云ふものは餘り長くないやうに考へられる、ラポン人種は殊に濕潤的人民であつて冬は地下の小屋に住ふけれども夏になると自分の飼養する畜類を拵へて、那威の海岸に來て蚊軍を避けたりなどして居る、全く自由な身躰であつて、極北岬より緯度六十四度に至る所までは彼等が自由自在にして居る所である、又其住ふ所は一般に湖水か或は森林の中などである、其他生活の仕方なども到底吾々の豫想する事の出來ない方法を以て其日を暮して居る、

ラポン人種の重なる富源は馴鹿に在る、彼の肉は長く蓄へるには之を鹽肉にする、是か彼等が唯一の肉類であつて、此肉を小さく刻み麥などを混ぜて麵麭の種類を拵える、角は家具を拵え、乳はバタ或は乾酪を拵える、皮は冬の衣服を初めとして天幕の蔽に用ゐる、それから又毛は

瑞典人に賣つて其代りに火酒或は自身で拵える事の出來ない道具などを買つて來る、實に其生活の單純なるには驚く是れ位奇妙なる人種はないと考へる、又彼等が冬期に己が飼養する牧畜などを保護しなければならぬのは、狼が群を爲して來襲するのを防禦しなければならぬ、又雪が降つて三尺以上にまで積れば必ず其雪を拂つて苔を絶さないやうにしなければならぬ則ち馴鹿の食料には苔のみである故に若し之を絶したならば彼等は忽ち餓死しなければならぬ、其の氣候の猛烈なる寒さに攝えると云ふことに就ては實に驚くの外はない、また勞働の點に於ても、又寒氣を凌ぐ點に於ても實に豫想外である雪風の激しき夜に於ては彼等は地面の上に轉つて、而して雪に埋められる、其雪が歇むと起上つて身躰を振ひつゝ歩き出す、斯の如くであつて、吾々には到底外へも出られないやうな寒さの時に於て數時間も戶外に出で居つて一向意としない、又冬の半に或婦人が雪の積れる街道の中で子供

を産んだ、而して母子とも健全であると云ふ如き現象を呈せり、

併し人の身躰と云ふものは、或點までは堪え得ることは出來るけれども、夫れより以外には、決して天然の氣候に打ち克つことの出來ないものであるラポン人種は早く年をとり、若くして死ぬ、故に彼等の將來と云ふものは、實に慘憺たる境遇に陷つて仕舞ふ、老人が一たび病氣に罹り若し其居を移す場合には、其老人の傍に多少の食料を殘して其地を去つて仕舞ふ、殘された老人は遂に餓死して猛獸の餌食となるのである、

ラポン人種は一般に貧乏である、先づ一家四人の家族を養ふ爲には四百の馴鹿がなければならぬ、其價段から之を概算すれば、先づ三千法から四千法である、

ラポン人はヒンマルク語に接近した一つ言葉を談ず、又ラポン人種はケース人種とは同じ形をして居つて、言語に於ても亦能く似て居る、併し十分に研究して見ると、ラポン人種とヒンマルク種は人種を異にして居る、

此地に耶蘇教が傳播したのは極めて近世であつて丁林人が極く以前より世界の各所に耶蘇の使者を遣つたが斯の如き人種が此邊に居ると云ふ事を眼中に置かなかつたやうである、耶蘇教を信ずると同時に又一種の奇異なる信仰を持つて居る、彼等には書時雛鳥にあつた如く、未來を語る豫言者が居つて或は星を觀、或は雲を觀、飛ぶ鳥を觀て種々な事を豫言の材料として居る、而して他の宗教と云ふものは認めない、

第九　フジュルド

コートケーノに於ては、吾々は或軍吏の家に宿泊したが、此者は多少英語を談した、此者の爲に四人のヒンマルク人を雇て、是等に予が荷物を擔がして運搬せしめて、ボースコップまで導く約束をした、此處より太洋

に至るまでアルゼン河は大約十六ミルス間流れて居るが、此間九ミルスだけを除くの外は船を浮ぶるに適して居らぬ、普通の道路は馬に依て往くことが出來るけれども、コートケーノには使用すべき馬がないそれでホースコッパの地に航すべきであるかそれを待つ事が出來ぬ、餘義なく路を通ることになつた、其路は却つて太洋の方へ山るには前者よりも大に適當して居る路である、加之距離と云ふても餘り甚はない其一方の路を辿るには極く熟練せる案内者と健足なる旅行者にして也六日間の日數を費すが、予が辿らうとする路の方は、先三日を出ずして目的地に達することが出來る、それには九ミルスの間はアルゼン河を下らなければならぬ、而してクドヌヤルッヤーに至り、夫れより五ミルス間を步行して、再びアルゼン河に浮んで是より三ミルスばかりにして河口に至るのである、

我々は七日の朝八時に二個の船を倩ふて此地を出立することになつ

たコートケーノよりアルゼン河は、其河幅が次第に擴がつて流も餘り急流でない、之を溯るには順風に乘ずれば一時間に一ミルス位出ると云ふ話である、此日の正午頃に五十尺以上もある奔瀧のある所に到着したが爲に餘義なく船を下りて荷物を自身で運ばなければならぬ、此處を距る遠からざる所にヒンマルク人とラポン人の二の家族を見たが他には羊の群が澤山居つたやうである、加之彼方此方には鷲が群をなして奇妙な聲を揚げて飛ぶのを見るが、是が先づ此村の生存物である風景は猛烈なる寒帶地方にあるが爲に趣は更にない、眼に映ずるのは始終同じ景色であるから殆ど是が爲に眼を疲らして仕舞ふ、十時頃になつて漸く一の岸の如き所に達したが、是が我々の航行する終點であつた、是より先は非常に危險な所であつて、誰も下つた者がない、數年前の事であつたさうだが、或軍吏の如きは、非常に急ぐが爲に此處を無理に下らんとして遂に溺死したと云ふやうな事もあつて人間は此邊

を通る者がない、爲に通れない場所となつて居る、此處を上つてからは草木などは極めて矮小なものであつて漸く進むに從つて山の半腹に小さなる小屋があつた、其小屋で一夜を過さなければならぬ、是は政府が旅客の爲に建築したる休憩所であつて、誰も此中には居らぬ、其中には椅子や腰臺などもないけれども、此地方へ來て斯の如き小屋に寢ると云ふのは實に幸福であつて、是が爲に蚊軍の襲撃なども防禦することが出來る、我々の連れて來た者等は戶の外に寢ることになつたが、是等は樹の枝枯草などを持つて來て火を燃して暖をとつた、我々は疲勞の甚しき爲めに殆ど死人の如く倒れて寢て仕舞つた、

翌朝七時に漸く眠りが醒めた、時分には霧が深くあつたから、此日は必ず好天氣であると云ふことを稟報した使丁は荷物を分けて山立の用意に取かゝつた、是れから路を辿るのに非常に苦が生えて居つて足を止めることが出來ない、此邊には鳥も居らなければ木など

もない、又草なども殆どない、加之左方には雪が段々見えて來た、是が即ちクゥナンゲンの嶺である、東北の方は砂花として眼に入るものがない、實に其無色と云ふは沙漠どころの黒色ではない、今にして此地の黒色を想像すると思はず身に粟を生ずる、此邊には沼澤が非常に多いが爲に蚊は非常に多く發生する、實に此蚊の勢力と云ふものは非常なものであつて、彼が群を爲して飛ぶ時には一の雲の如く見える、彼が空より下りて來る時には恰も鋭き劍が天より降るやうな心持がする、此蚊は尻尾の方に血を吸ふ器械が備つて居つて、之を肉の中に刺込む、是に刺されると其痛さは非常なもので狂せむばかりの心持がする、一たび刺されると顏などは殆ど膨れて、其人は元の容貌を認めることが出來ない位になる、殊に面白きは、蚊の中でも雌の蚊が人を刺すので、雄の方は雌に比ぶれば形も小さく、また從つておとなしい、雌は一度に三百以上の卵を水中に生む、而して十五日以内に於て是が孵化して空中を飛

揚するやうになる、沼の邊りを人が通行すると鼻や目耳口などの差別なく飛び込んで來るやうな有樣である、之を防ぐに種々なる方法を講じて、我々はミネソタより帽子を拵えて來た、それは極く薄い布を以て頭全体を隠して仕舞ふのである、又此邊では單に乳と何かを混ぜた物を顔に塗布するか到底我々にはそんな事は出來ない、加之僅かの時間は宜いかも知れないが長い間は到底其効用はない、氣候も悪く間は暑いが爲に餘儀なく濡き衣服を着るやうになると衣服の上より刺し込む、吾々は斯の如くして路を進めるが、非常に疲勞も加はるし、又飢を感ずるが一滴の薬も發することが出來ない、又風光を眺めることも出來ない、固より沙漠も遠く及ばぬやうな慘憺たる所であるから風光もないのである、正午頃になつて多少の休憩をする休憩をする時分には多少の乳汁に些のラム酒を入れて飲み、辛く疲勞を慰める位のものである斯の如き場合には然得と云ふやうな感じは起らない、只一日も早く目的の地に達しやう、一日も早く此苦みを免かれやうと思ふのみである、夜の一時頃になつて南方に白雪皚々たる山の形が見えた、即ち是はシーランドの山に違ひない、シーランドはアルテン河の河口に在る島である、尙ほ此河に沿ふて進むと再び荒原なども現はれて來るし、又從つて小さな樹などの生えて居るのも見へた、漸く三更頃になつて吾々が一夜を明すに足るべき町に達したが、此日の旅行は丁度十五時間ばかりで十二ミルスの路を歩いた、此處には前と同樣な政府で拵えた家があつて、一人の正直なる女が居つて、此處を通る旅行者を氣附ける爲に住つて居る、八時間許の間は馴鹿の毛皮に横臥して愉快に眠を貪つた、

九日の朝は此河より船に乘つたが、此處よりはアルテン河も、河幅が廣く水流も靜かである、此地の家は沙漠に於ける林泉地とも言ふやうなものであつて、此地を旅行する者は此處で休憩する外他に道はない、此